

『ヴァジュラーヴァリー』 「彩色の儀軌」 和訳

森 雅 秀

A Japanese Translation of the *Rajahpātanavidhi, Vajrāvalī nāma maṇḍalopāyikā*

Masahide MORI

凡例

- ① 以下に示したのはAbhayākara Gupta, *Vajrāvalī nāma maṇḍalopāyikā*の第13儀軌「彩色の儀軌」(*rajahpātanavidhi*)の翻訳である。
- ② 和訳は現存する11種のサンスクリット写本にもとづいて筆者が校訂したテキスト(未刊)によった。サンスクリット写本については森(1991: 57-59)を参照されたい。このうち、影印版が刊行されているLokesh Chandra (1977)では、該当箇所はff. 98-145に含まれる。
- ③ 和訳に際してはチベット訳テキストも参照した。チベット訳は北京版、デルゲ版、ナルタン版の3種の版本を用いた。北京版の該当箇所は以下の通り。TTP, Vol. 80, 98.3.2-107.2.2
- ④ 内容の理解をはかるため()内に説明の語句、原語などを入れた。内容に応じて段落をわけ、適切と思われる見出しを訳者が付けた。ただし、全体の見出しである「墨打ちの儀軌」は著者自身が示した用語である。翻訳上補った語句は[]内に入れた。
- ⑤ ツォンカパ(Tsong kha pa Blo bzang grags pa, 1357-1419)の『真言道次第』(sNgags rim chen mo, NRC)には、VAの内容に応じて関連する文献が多数紹介されている。訳注ではこれらを可能な限り示した。その場合、NRCの該当箇所を[NRC 131.3]のような形で示すが、これは北京版のp. 131, f. 3を表す。また、VAの対応する箇所が広範囲にわたる場合、その始まりと終わりの語句を太字にし、括弧に入れて示す。
- ⑥ 訳注の中でVAの特定の箇所を指示する場合、<13.1.1>のように、本稿で用いる分段でそれを示す。

13. 彩色の儀軌

13.1 準備

<13.1.1>

つぎにバリを与え¹、「ヴァム、ラム、ラム、ハム、ヤム」(vaṃ laṃ raṃ haṃ yaṃ)という種子から生み出された白、黄色、赤、緑、黒という色、これらは月長石、カルケータナ、ルビー、マラカタ、ラピスラズリから作るか²、あるいは真珠、金、珊瑚、混合したもの、ラージャヴァルタから作るか——この場合の「混合したもの」とは真珠以下の4種から作る——あるいは鉱物や穀物や花から作るか、適宜、焼き煉瓦、石炭、生物³の粉から作

り、うまくまとめたものである。これらが「ヴム、アーム、フリーヒ、カム、フーム」(vaṃ āḥ hrīḥ khaṃ hūṃ)という〔種子〕から作った大日などの〔五仏の〕自性をそなえていると静慮し、虚空におすえした一切如来の心臓のところ、「ヴム⁴」などの〔五種の種子〕から作った智慧の顔料を、墨打ちの手順のところ述べた⁵「輝く視線」によって引き寄せ、〔三昧耶の顔料へ〕挿入し、一つの味とすることで、〔三昧耶の顔料に〕智慧の顔料を導き⁶、「ヴム」などのマントラを唱え、「オーム、金剛の色よ、誓願よ、フーム」⁷というマントラを108回唱えよ⁸。同様に、輝く視線によって活性化しながら、それぞれの〔顔料〕に「フリーヒ」⁹の文字を置く。「顔料（愛着）が衆生に潤沢であれば、諸仏、諸世尊は衆生への愛着（顔料）に染まる」という真理にもとづき、「顔料は輝け」と言って、真理の加持により〔顔料を〕輝かせよ。〔顔料に〕尊格を加えることの威光によって輝くのである¹⁰。香や花などによって供養し、新しい容器の中に〔顔料を〕入れよ。

<13.1.2>

つぎにマンダラのある中心にあるキーラを、後述の四つの「フーン」のマントラとともに抜き、自分の手にある金剛杵の中に注意深く入れ、キーラの穴を五色の顔料で満たし、平らにする。金剛鈴の音と金剛杵の歌謡によって悪い兆候を取り除き、

「この法界は清浄にして、衆生界を解脱させるものである。金剛持ご自身は王にして、一切如来のよりどころである。すべての誤りから解放され、マンダラの中に安住するものである。」

と、法界が清浄であると念じ、はじめに内マンダラに立ち、右手に金剛杵を持ち、左手は金剛拳を取り¹¹、「オーム、金剛の色よ、三昧耶よ、オーム、アーハ、フーム」あるいは「オーム、金剛の顔料よ、三昧耶よ、フーム」¹²と唱えながら、マンダラの中で東を向いて立ち、東北の隅から始め、右回りに顔料を塗れ¹³。外からは阿闍梨か、あるいは絵師などが安楽な方法で〔塗れ〕¹⁴。

<13.1.3>

〔顔料は〕門の20分の1の厚さで線を塗れ。それぞれが適宜、均等で、曲がらず、途切れず、1ヤヴァの長さの中で、上も下も適宜美しく〔塗れ〕。厚く塗りすぎると病気になる。薄すぎれば財が無くなる。曲がると憎悪が起こり、途切れると師と弟子が死ぬ。右回りにしないと顔料に「突き刺し」が起こる¹⁵。

「突き刺し」とは成就の因が無くなることである。〔顔料が〕相互に混ざり合うと、家系の断絶が起こる。

誤りをしずめるために世尊はおっしゃった。

「真理の御心と結びついていない者たちに、顔料を塗るときに誤りがあっても、

良き真理の御心と結びついた者たちには、いかなる時も障害となることはない。

マンダラは確かに「真理が」形を取ったものである¹⁶。」

と。顔料の線に関しても、白などの宝でできた針などの状態に注意を払わなければならない。

「阿闍梨などが」出入りする事で線や顔料を損なうおそれがあるので¹⁷、

金剛の威力によって智慧の顔料の線を虚空に引き上げたと言じ、「オーム、金剛の威力よ。進め。フーム」¹⁸と唱えながら、根本線の内側のマンダラを描くために「マンダラに」入れ。もしくは「マンダラから」出よ¹⁹。

13.2 共通部分の彩色

<13.2.1>

これについて、はじめに外のマンダラと内のマンダラについて、すべての尊格のマンダラに共通の色の順序を述べよう。

東南西北の如来と中央の主尊の色に従って、外の線から内の線へという順に、五色のラジャスの壁の線の色となる²⁰。四方と中央に別の尊格をお据えする場合は、印となる如来の色に従う²¹。観想上のマンダラの場合、この五重の壁は、五種の宝石でできており、「各色の」間隔は1ヤヴァであるという説もある²²。この壁は一つであるが、上へ上へ順に五種の宝石で作られるというまた別の説もある。

このうち、第一の説の場合、宝の帯の区画は赤、瓔珞半瓔珞の区画は黒である²³。第二の説の場合、はじめの色の宝石でできた部分のみは、さまざまな色の宝の帯である。あるいは、そこには別の色の宝石で作られた宝の帯が置かれる。第5の宝石でできた部分のみは、さまざまな色の瓔珞半瓔珞の帯か、あるいは、そこには別の色の宝石で作った瓔珞半瓔珞の帯が置かれる²⁴。瓔珞の帯のように、その上には宝の帯をという別の説も説かれる。ふたつの説のいずれの場合も、ヴェーディカーは水晶を敷き詰めるか、あるいは金で作るか、ルビーで作るか、別の宝石で作るか、適宜装飾せよ。

<13.2.2>

バクリーと外廊は白である。バクリーと外廊とアンチャラの間部（アンタラーラ）の区画は青で、虚空を本質とするからである。そのためアンタラーラの帯は「暗黒の帯」と呼ばれる²⁵。アーサーラ²⁶は適宜美しく宝石で作り、さまざまな宝の旗などで飾られる。

トーラナの柱は各方角の如来の色。「トーラナの」折れ線の内側も、天蓋の下の地の区画も同じで、これは如来のそれぞれの色の輝きがちりばめられた虚空を本質とするからである。ひづめ、ヴァランダーは適当な色で適宜飾る。マカラの帯も。「法」輪は金色であ

る。一説によれば別の宝石で作る。牡鹿と雌鹿は金ででき、他の宝石がちりばめられている。

羯磨杵の中心部は黒である。一説では主尊の如来の色である。中心の鍔は各方角の如来の色である。これとは別の鍔はその両側の如来の色である。五鍔の場合、これとは異なる方向や中心の如来の色で適宜〔描く〕。一方向の輻すべて、その方角の如来の色という説もある。マンダラの中尊が四面の場合、各方角の顔の色であるという別の説もある²⁷。

賢瓶は金である。如意樹はこれとは別の優れた樹に似ている。

蓮華の花芯は緑、葯は黄色、花卉はさまざまな色である。その下地は赤で囲まれた白である。

法源の部分の線は白である²⁸。鉄囲輪の場合も水晶であれば白であるが、金であれば黄色である²⁹。金剛杵〔輪〕とその線は黒である。他のものは白あるいは黄色であると説く。

金剛地の色は適宜飾る³⁰。観想上のマンダラの場合、下の風輪の端から上のアカニシュタ天の端まで金剛牆があるため、風輪などは適宜さまざまな色になるからである³¹。火炎は五如来の色というのがきまりである。

<13.2.3>

文殊金剛〔マンダラ〕は

「正等覚の智身であるので、金剛の部族の能弁者と知られる。法身が自性清浄であるとき、その心マンダラである³²」

という正しい知識から、

「白、黄色、同様に赤、緑、そして黒が壁の色である³³」

と説かれる。

「諸法は自性が白である故、このとき、語自在は白である³⁴」

と説かれるので、白い語金剛を主尊とする場合、ラジャスの線は白、黄色、黒、緑、白となる³⁵。

『サンブタ〔タントラ〕』所説の金剛薩埵も白であるが、阿閼と一味であることを示すために内側の壁は黒である。しかし、他のものは〔その場合も〕白だけといい、「主尊となった語金剛が白である時」と説かれる³⁶。

<13.2.4>

根本線の内側のマンダラについては、二本ずつの対角線によって分割される四方の区画は各如来の色である³⁷。観想上のマンダラの場合、四方の屋根も同様である。柱も同様で、それぞれ内院の如来のシンボルの帯がついている。主尊の区画は主尊の色である³⁸。

雑色蓮華の花卉の南西は緑、北東は黒、南東と北西は黄色、四方は赤である³⁹。

主尊の帯には主尊のシンボルが連なっている。別の線については、太さと色は適宜描け。

<13.2.5>

サンヴァラマンダラの場合、意輪は黒である。その輻の間の部分は語輪の中心部であるため、赤である。である。語輪は赤で、その輻の間は身輪の中心部であるため、白である。身輪は白で、その輻の間は東以下、大日以下の如来の色である。三つの輪の周りの部分⁴⁰は順に黒い金剛杵、赤い蓮華、白い法輪の連なりでできている。外から内側に向かって、緑、白、赤、黄色、黒の五つのレーカーがある⁴¹。東、北、西、南、中央の区画は白、緑、赤、黄色、黒である。[観想上のマンダラの]屋根も同じである⁴²。あるいは黒、緑、赤、黄色、そして白を混ぜた青が五つのレーカーで、屋根も同じであると、他のものは説く。

<13.2.6>

このように、順次、色の順を考察し、顔料を塗れ。これについては、巡り合わせのよくない時代には、シンボルと印を適宜描く。めぐり合わせが悪くはないときは、尊格のおからだを描く。絵画、鋳造、浮き彫り、あるいは塑像を安置せよ⁴³。ナーガブッディ様も次のようにおっしゃっている。

「種子を置く、あるいはシンボル、あるいは尊格のお姿そのもの、すなわち鋳造や浮彫を能力に応じてマンダラに安置せよ⁴⁴。」

印を描くことは『アビダーナ・ウッタラ・タントラ』に説かれている。

「能力がない場合、描いた印か、シンボルを安置せよ。」

また

「顔料、あるいは絵筆によって描いたもので、[マンダラは]描かれる。」

とも説かれる。『吉祥サンブタ・タントラ』にも

「このように鋳造や浮彫などのすがたによっても[よい]。[あるいは]シンボルや印がふさわしい。」

と説かれている⁴⁵。

13.3 各マンダラの彩色

13.3.1 文殊金剛マンダラ

それ故、マンジュヴァジュラ・マンダラに関しては、中心にマンジュヴァジュラの紺色の剣が月輪の上にある。

東には月輪の上に毘盧遮那の白い八輻輪、南には日輪の上に宝生の9部からなる緑の宝石、西には日輪の上に阿弥陀の赤い八葉蓮華、北には日輪の上に不空成就の緑の剣。

南東にはローチャナーの青い瞳の輝くふたつの白い目が雲の上に乗る。南西には月輪の上にマーマキーの黒い五鈷金剛杵。タントラではそのように説かれているからである。北西には月輪の上にパーンダラーの赤く花開いた蓮華で、茎と根もそなえている。北東には月輪の上にターラーの黄緑色のウトバラ。

南東以下の四隅と東門の左右、2 マートラずつ離れた両側に、月輪の上に、順に色、声、香、味、触、法界の各金剛女の、白い鏡、ガンダルヴァの青い琵琶、黄色い香の貝殻、赤い味の容器、さまざまな色の衣、白い法源がある。

東以下の四門には日輪の上にヤマーンタカ、プラジュニャーンタカ、パドマーンタカ、ヴィグナーンタカの黒い金剛の鎚、金剛杵を付けた白い棒、赤い蓮華、青い畏怖金剛杵。

この場合 [台座の] 19 の月輪と日輪は雑色蓮華にのる。すべてのシンボルは光輝き、それぞれの方角に頭を向けている。マンダラの主尊の [シンボル] は西に頭を向ける。このことは以下の [マンダラ] でも同様である。

金剛サッタがマンダラの主尊の場合、青い吉祥の金剛杵が [描かれる]。蓮華と月輪の中央に羯摩杵という説もある。

中心の火炎を取り囲む線には顔料を落とさないと賢者たちは言う。 [内陣の中の] 円の外側で梵線に向かって四マートラ離れたところに、四マートラの大きさの瓶があるといい、8つの瓶は甘露の満ち、金色であるというのが第1の説である。それぞれの方角の如来の色で出来ているというのが別の説である。この場合、以下のマンダラでも、中央に別の如来のシンボルをおいた場合、その [如来の] ところに中央のシンボルを [代わりに] 描かなければならない⁴⁶。

13.3.2 『ピンディークラマ』所説のマンダラ

『ピンディークラマ』に説かれたマンダラについて。中央には日輪の上に阿閼金剛⁴⁷の、ラピスラズリのような色の畏怖の五鈷金剛杵。触金剛女の衣も。

第1と第2の帯にいる大日以下の12尊のシンボルは前のマンダラと同じである。

第3の帯には門の横に、梵線から4マートラ離れて、左側に弥勒の、法輪を伴う龍華樹。右側には地蔵の白い八輻輪。南には同様に金剛手と虚空蔵の、金剛杵と9部のマラカタ宝。西には同様に世自在⁴⁸とマンジュゴーシャの、赤い蓮華と金剛杵。北には同様に一切除蓋障と普賢の、剣と金剛杵。

東以下の門には、順にヤマーリ以下の金剛の鎚、金剛のついた白い杖、赤い蓮華、羯摩杵。南東以下の四隅には順にアチャラ、タッキラージャ、ニーラダнда、マハーバラの、剣、金剛杵、金剛のついた青い杖、金剛のついた黒い杖。ウシュニーシャチャクラヴァル

ティンの青い金剛杵。ヤマリーのシンボルの外側に。一説では黄色いチャクラ。スンバラージャの金剛杵。パドマータカのシンボルの外側に。

弥勒以下の8尊のシンボルは月輪の上に乗る。ヤマリー以下の10尊のシンボルは日輪の上に乗る。この場合、31の月輪と日輪は雑色蓮華の上に乗る。瓶の描き方は前と同じである。

13.3.3 『サンブタタントラ』所説の金剛薩埵マンダラ

『サンブタタントラ』⁴⁹に説かれる金剛薩埵マンダラについて。中央には月輪の上に金剛薩埵の青い五銚金剛杵。

東には月輪の上にシャーシュヴァタ⁵⁰のチャクラ。南には日輪の上にラトネーシャの宝。西の日輪の上には阿弥陀の矢。北の日輪の上に不空成就の羯摩杵。

ローチャナーの雲の上のふたつの目。マーマキーの矢。パーンダラーの矢。ターラーの赤いウトバラ。

第2重には東にラウドリーの矢。南にヴァジュラビンブヤーの金剛杵。西にはラーガヴァジュラーの剣。北にはヴァジュラサウムヤーの杯⁵¹。北東にはヴァジュラヤクシーの白黄色の杖。南東にはヴァジュラダーキニー⁵²の赤黄色の蓮華。南西にはシャブダヴァジュラーの短剣。北西にはプリティヴィーヴァジュラーの白緑色の瓶。

第三重には東に嬉女の金剛杵⁵³。南には鬘女の金剛杵。西には歌女の小シンバル。北には舞女の緑の三銚金剛杵。北東にはヴァンシャーの笛。南東にはヴィーナーの琵琶。南西にはムクンダーのムクンダ太鼓。北西にはムラジャーのムラジャ太鼓。

外の帯の南東には華女の華鬘。南西には香女の香炉。北西には灯女の灯明の柄。北東には塗香女の塗香の貝。東にはアードルシャーの鏡、南にはラサーの食器。西にはスパルシャーのさまざまな色の衣。北にはダルマーの白い法源。

東以下の四門には、順に金剛鉤女、金剛索女、金剛鎖女、金剛鈴女の金剛鉤、金剛索、金剛の輪で出来た金剛の鎖、金剛鈴で、日輪に乗る。

ここで述べた日輪で出来た座に乗る7つのシンボル以外のシンボルは月輪の上に乗る⁵⁴。これらの37の日輪と月輪は雑色蓮華の上のカパーラの上に乗る。瓶の描き方は前と同じであるが、第6の円の外側にとというのが相違点である。

13.3.4 ジュニャーナダーキニーマンダラ

ジュニャーナダーキニーのマンダラについて。中央、東、北、西、南の順にジュニャーナダーキニー、ヴァジュラダーキニー、ゴーラダーキニー、ヴェーターリー、チャンダー

リーの金剛のついたカトヴァーンガ。北東、南東、南西、北西にシンヒニー、ヴァーグリー、ジャンプキー、ウルーキーの金剛鉤。

東、北、西、南の門にはラージェンドリー、ディーピニー、チューシニー、カーンボージーの順に、合掌した両手、合掌、手のひらに血を満した両手、親指の先を合わせ、人差し指を伸ばした金剛合掌。

この場合、シンボルと印契は雑色蓮華と日輪の上に乗る。観想上のマンダラの場合、ジュニャーナダーキニー以下の雑色蓮華は、順に5頭の獅子、白象、七宝の山、水牛、八大竜王の尻尾、4人の死体の上に乗る⁵⁵。現在では、彩色マンダラの場合、巡り合わせがよくなければ描かない。あるいはそうではない時でも、労力をいとうためや、施主が簡便なものを好むため、[描かないことがある]。めでたいプラサーダのために、施主の力量に応じて、描かれることもある。このように、この後のマンダラの場合でも、適宜、描くか描かないか考察せよ⁵⁶。

瓶を描くのは外の円の外側である。

13.3.5 ヘーヴァジュラマンダラ

17尊からなるヘーヴァジュラの3種のマンダラについて。雑色蓮華の花芯に青い畏怖金剛杵。

東、南以下の四方と、北東、南東以下の四隅の蓮弁には、順にヴァジュララウドリー、ヴァジュラビンパー、ヴァジュララーガー、ヴァジュラサウミヤー、ヴァジュラヤクシー、ヴァジュラダーキニー、シャブダヴァジュラー、プリティヴィーヴァジュラーの矢、金剛杵、剣、杯、黄色い杖、赤黄色の蓮華、短剣、白緑色の瓶。

第二重には北東、南東以下[四隅]にヴァンシャー、ヴィーナー、ムクンダー、ムラジャーの笛、琵琶、ムクンダ太鼓、ムラジャ太鼓。

東以下の門には金剛鉤女、金剛索女、金剛鎖女、金剛鈴女の金剛鉤、金剛索、鎖、金剛鈴。

これらの17のシンボルはカパーラと日輪の上に乗る。ヴァンシャー以下の8尊はカパーラの下に雑色蓮華がある。[主尊のヘーヴァジュラが]二臂と四臂の場合、カパーラはない。

[主尊のヘーヴァジュラが]一六臂のマンダラの場合、雑色蓮華の花芯には青い畏怖金剛杵。東以下の[四方]と北東以下の[四隅]の蓮弁には、順にガウリー、チャウリー、ヴェーターリー、ガスマリー、プッカシー、シャヴァリー、チャンダーリー、プラモーハーの矢、金剛杵、血のあふれたカパーラに乗る亀、脂肪であふれたカパーラに乗る蛇、生肉

であふれたカパーラに乗る獅子、精液にあふれたカパーラに乗る比丘、血の入ったカパーラに乗る虎、盃。

第2重の四隅にはヴァンシャー以下の前と同様のシンボル。

東以下の門にはハヤースヤー⁵⁷、スカラスヤー、シュヴァーナースヤー、シンヒニーの金剛鉤、金剛索、鎖、金剛鈴。

これら17のシンボルは日輪の上にある。ヴァンシャー以下の8尊の日輪の下には雑色蓮華がある。中心の光炎の外側に前と同様に瓶がある。

13.3.6 ナイラートミヤーマンダラとクルクッラーマンダラ

ナイラートミヤーマンダラについて。雑色蓮華の花芯と東以下の蓮弁には、順にナイラートミヤーマンダラ、ヴァジュラー、ガウリー、ヴァーリー、ヴァジュラダーキニー、さらに、第二重にいる16臂のマンダラで述べたガウリー以下の8尊の⁵⁸金剛杵。

ヴァンシャー以下のシンボルは前と同じである。ただしハヤースヤー以下はカルトリ。ハヤースヤーの外側にケーチャリーの金剛杵。シュヴァーナースヤーの外側にブーチャリーの金剛杵。

この場合、4つのカルトリは日輪の上に乗る。そのほかのシンボルは月輪の上に乗る。外のガウリー⁵⁹以下18尊の月輪など⁶⁰は、雑色蓮華に乗る。

ヴァンシャー以下の8尊がない場合⁶¹、残りの15尊は月輪の上にカルトリ。ガウリーの外側にケーチャリーのシンボル、ヴェーターリーの外側にブーチャリーの[シンボル]。

クルクラーマンダラの場合も同様で、相違点は、[中尊として]月輪の上に、茎のついた赤いウトパラのつぼみの付いた矢。この場合、15尊の女尊も、クルクラーと同じように赤い色である。

13.3.7 ヴァジュラアマリタマンダラ

ヴァジュラアマリタの第1のマンダラについて⁶²。雑色蓮華の花心と東以下と北東以下の蓮弁には、順にヴァジュラアマリタ、サウムヤー、サウムヤヴァダナー、チャーンドリー、シャシニー、シャシマンダー、シャシレーカー、マノージュニヤ、マノーフラダナカリーの金剛杵。さらにシャシレーカーには新月⁶³。

第2重には北東以下に華女、香女、灯女、塗香女の花の小箱、香炉、灯明の柄、塗香の貝である。

東以下の帯にはヴァンシャー以下4尊の笛などの4つのシンボル。

東以下の門にはブリクティータランガ、バヤビーシャナ、ハヤルーパ、ガナナーヤカの金剛鉤、縹索、鎖、鈴。

これらの21のシンボルは月輪に乗る。華女以下の12尊の月輪の下には雑色蓮華がある。あるいはマンダラに含まれる尊格すべてに法源を描く。これ（法源）だけを描くという別の説もある。他の3つのヴァジュラアムリタのマンダラのシンボルは『ヴァジュラアムリタタントラ』を参照せよ⁶⁴。

13.3.8 ヘーヴァジュラマンダラ

9尊のヘーヴァジュラの3種のマンダラについて。雑色蓮華の花心の日輪の上に青い畏怖金剛杵。東以下と北東以下の蓮弁の月輪の上に、順にガウリー、チャウリー、ヴェーターリー、ガスマーリー、プッカシー、シャバリー、チャンダーリー、ドーンビーのカルトリ、小太鼓、亀、蛇、獅子、比丘、チャクラ、金剛杵。

[主尊が] 16臂の場合、日輪の上に羯摩杵のついた白いカパーラというのが相違点である。外の円の外側に瓶。

13.3.9 マハーマーヤーマンダラ

マハーマーヤー・マンダラについて。赤蓮華の花心の日輪の上に世尊マハーマーヤーの姿をとるもの⁶⁵の蓮華の器。東以下の蓮弁の月輪の上には、右回りにヴァジュラダーキニー、ラトナダーキニー、パドマダーキニー、ヴィシュヴァダーキニーの金剛杵、宝の房、雑色蓮華、剣。

ブッダダーキニーは金剛薩埵を抱擁して立つので、そのシンボルは特別には描かない⁶⁶。

13.3.10 ブッダカパーラマンダラ

9尊からなるブッダカパーラ・マンダラについて。雑色蓮華の花心の日輪の上にダマル太鼓。

東、北、西、南、北東、南東、南西、北西の蓮弁には、日輪の上にチトラセナー、カーミニ、パーターラヴァーシニー、サウバドラー、サウンディニー、ブーティニー、チャトルブジャー、アーカーシャヴァーシニーのカルトリ。

13.3.11 ヴァジュラフーンカーラマンダラ

ヴァジュラフーンカーラマンダラについて。中央にヴァジュラフーンカーラの金剛杵。東以下左回りにヴァジュラダнда、アナラールカ、[ヴァジュラ]ウシュニューシャ⁶⁷、ヴァジュラクンダリー、南東以下、右回りにヴァジュラヤクシャ、ヴァジュラカーラ、マハーカーラ、ヴァジュラビーシャナ、ウシュウニーシャ、ヴァジュラパーターラの金剛鎚、金剛の棒、赤い蓮華、羯磨杵、鉤、曲刀、三叉戟、劍、チャクラ、金剛の棍棒で、すべてのシンボルは雑色蓮華と日輪に乗る。

あるいは東以下の四方には、右回りにヤマーンタカ、プラジュニャーンタカ、パドマーンタカ、ヴィグナーンタカの金剛の鎚、金剛の印の付いた白い棒、赤い蓮華、羯磨杵。

南東以下の四隅にはアチャラ、タッキラージャ、ニーラダнда、マハーバラの劍、金剛杵、金剛のついた青い棒、金剛のついた棒。ヤマーリ (=ヤマーンタカ) のシンボルの外に、ウシュニーシャチャクリンの金剛杵。パドマーンタカのシンボルの外にスンバの金剛杵。これらの11のシンボルは雑色蓮華と日輪の上に乗る。

あるいは、ヴィグナリー (=ヴィグナーンタカ) の畏怖金剛杵。南東以下にはタッキラージャ、ニーラダнда、マハーバラ、アチャラの鉤、金剛のついた青い棒、三叉戟、劍。ウシュニーシャチャクリンの黄色いチャクラ。他は直前と同じ。

あるいは、ヤマーリなどの4尊の金剛鉤、金剛索、金剛鎖、金剛鈴。他は直前と同じ。

13.3.12 サンヴァラマンダラ

サンヴァラマンダラについて。雑色蓮華の花芯にある日輪の上に、吉祥サンヴァラの青い五銛の畏怖金剛杵。四方の花弁にはダーキニー、ラーマー、カンダローハー、ルーピニーのカルトリ。四隅の花弁には蓮華の容器。身輪などの24の輻にはプラチャンダー、チャンダークシー、プラバーヴァティ、マハーナーシー、ヴィーラマティ、カルヴァリー、ランケーシュヴァリー、ドゥルマチャーヤー、アイラーヴァティ、マハーバイラヴァー、ヴァーユヴェーガー、スラーバクシー、シュヤーマーデーヴィ、スバドラー、ハヤカルナー、カガーナナー、チャクラヴェーガー、カンダローハー、シャウンディニー、チャクラヴァルミニ、スヴィーラー、マハーバラ、チャクラヴァルティニー、マハーヴィールヤーのカルトリ。勇者たちは主要ではないので、シンボルは描かれない。

門にはカーカースヤー、ウルーカースヤー、シュヴァーナースヤー、スカラースヤーの、四隅にはヤマダーディー、ヤマドゥーティ、ヤマダムシュトリー、ヤママタニーの、雑色蓮華と日輪の上にカルトリ。

この場合、東以下の四方は左回りに、南東以下の四隅は右回りにシンボルを置く。外の円のさらに外に、四隅に接して瓶を描く。その他のサンヴァラとヴァジュラヴァーラーヒーのマンダラのシンボルについては『ニシュパナヨーガーヴァリー』に説いた⁶⁸。

13.3.13 ブッダカパーラマンダラ

25尊からなるブッダカパーラマンダラについて。中心に雑色蓮華と日輪の上にダマル。

24尊の女尊のカルトリ。東以下の四方は左回りに、南東以下の四隅は右回りに[置く]。このうち、黒いチャクラの輻の上に、四方の花弁にはスマーリニー、カパーリニー、ピーマー、スドゥルジャヤーの[カルトリ]。四隅の花弁にはカパーラ。次に青い金剛杵の輪。第2重には赤い八輻輪に乗った八葉蓮華に、四方にシュバメーカーラー、ルーピニー、ヴィジャヤー、カーリニーの[カルトリ]。四隅にはカーリニー、マホーダディー、カーリニー、マールニーの[カルトリ]。次に赤い金剛杵輪。

第3重には白い八輻輪にある八葉蓮華に、四方にターリニー、ビーマダルシャナー、スダルシャナー、アジャヤーの[カルトリ]。四隅にはシュバー、オースターラキー、カーラートリー、マハーヤシャスの[カルトリ]。

門の蓮華にはスンダリー、ヴァスンダラー、スバガー、プリヤダルシャナーの[カルトリ]。

20の蓮華の上に日輪に乗ったカルトリと説かれている。

13.3.14 ヨーガンバラマンダラ

ヨーガンバラマンダラについて。雑色蓮華と月輪の上にマンダラの主尊の青い五銚金剛杵。

東北西南の内院には蓮華と日輪の上にカトヴァーンガ。北東、南東以下[四隅の]内院にはカトヴァーンガ、鉤、斧、棒。東以下の内院にあるカトヴァーンガの外側に、順に、顔に寄せた両手⁶⁹、合掌、智の付いた手のひら、棍棒。カトヴァーンガ以下のシンボルは蓮華と日輪の上に乗る。

火炎輪の外側の東の方角には甘露の3つのカパーラ。北には灯明の3つのカパーラ。西にはバリの3つのカパーラ。南に飲料用の3つのカパーラ。北東には手と塗香器。南東には琵琶と花の小箱。南西にはタルジャーニーをする手と香炉。北西には手のひらと灯明。

次に、金剛杵輪の外側で東以下の帯にそれぞれ4つずつと、門と四隅の8カ所で、24のカトヴァーンガ。甘露のカパーラ以下は蓮華と日輪の上に乗る。

13.3.15 ヤマーリマンダラ

ヤマーリのマンダラについて。羯磨杵のヴェーディー⁷⁰の中心に世尊ヤマーリの青い五銚

の畏怖金剛杵。

東、南以下の鈷の付け根にはシャーシュヴァタ、宝主、阿弥陀、不空成就の白い八輻輪、九部の緑色の宝、赤い八葉蓮華、白い劍。

羯磨杵の南東、南西以下にはヴァジュラチャルチカー、ヴァジュラヴァーラーヒー、サラスヴァティー⁷¹、ガウリーのチャクラ、金剛杵、蓮華、劍。

次に金剛杵輪。次に羯磨杵のそれぞれの方向に五鈷。東、南以下の門にはムドガラヤマーリ、ダンダヤマーリ、パドマヤマーリ、カドガヤマーリの20鈷の金剛杵の付いた鎚、白い杖、赤い蓮華、劍。

この場合、シャーシュヴァタと女尊⁷²のシンボルは月輪に乗る。それ以外は日輪に乗る。日輪と月輪の下には雑色蓮華がある。マンダラの四隅には蓮華に乗ったカパーラが4つある。鈷の側面には瓶がある。

13.3.16 金剛ターラーマンダラ

金剛ターラーのマンダラについて。雑色蓮華の花芯の月輪に金色の九鈷金剛杵。

東、南以下の四つの花卉に、華ターラー、香ターラー、燈ターラー、塗香ターラーの花輪、香の枝、灯明の枝、塗香の貝。

南東以下の花卉にはシャーシュヴァタ、阿閼、阿弥陀、不空清浄⁷³の法輪、金剛杵、蓮華、劍。

東、南以下の門には金剛鉤女、金剛索女、金剛鎖女、金剛鈴女の、雑色蓮華と日輪の上に、前と同様に鉤など⁷⁴。金剛鉤の外にウシュニーシャヴィジャヤーの、雑色蓮華と日輪の上に法輪。金剛鎖の外にスンバー⁷⁵の、雑色蓮華と月輪の上に蛇の縲索。

南東以下の四隅の蓮華には、ローチャナー、マーマキー、パーンダラー、ターラー清浄の菩提心の壺、メール山、火炉、大きな幡。蓮華の外には瓶。

13.3.17 マーリーチーマンダラ

マーリーチーマンダラについて。中央の雑色蓮華に、月輪あるいは日輪の上に矢。なぜなら夜は月輪に乗り、昼は日輪に乗った女神が活動するからである。

東、南以下の四方には、順にアルカマシ、マルカマシ、アンタルダーナマシ、テージョーマシの女尊の針、糸のついた針、アショーカ樹の蕾、矢。

南東、南西以下の四隅には、順にウダヤマシ、グルママシ、ヴァナマシ、チーヴァラマシの〔四方の〕アルカマシ以下のシンボルと同じシンボル。

外の部屋の帯には、東にマハーチーヴァラマシ、ヴァラーハムキ2女尊の金剛鉤。南に

はパダークラマシ、ヴァラレー2女尊のアショーカの蕾。西にはパラークラマシ、ヴァダレー2女尊の矢。北にはウールママシ、ヴァラーリ2女尊の針。

南東以下の四隅には、ヴァッターリ、ヴァダーリ、ヴァラーリ、ヴァラーハムキの針、糸のついた針、アショーカ樹の蕾、矢。

東以下の4門にはアーロー女尊の金剛鉤。南にはターロー女尊の金剛索。西にはカーロー女尊の金剛鎖。北にはサトサローサンバムールティ女尊の金剛鈴。

この場合、門護のシンボルは蓮華と日輪に乗る。それ以外は蓮華と月輪に乗る。

13.3.18 五守護マンダラ

五守護のマンダラについて。中央には雑色蓮華と月輪にマハープラティサラー（大随求明妃）の宝の房。

東の雑色蓮華と月輪には、マハーサハスラプラマルダニーのチャクラ（大千摧碎明妃）。南の雑色蓮華と日輪には、マハーメントラヌサーリニー（密呪随持明妃）の金剛杵。西の雑色蓮華と日輪にはマハーシータヴァティ（大寒林明妃）の蓮華。北の雑色蓮華と月輪には、マハーマーユリー（大孔雀明妃）の孔雀の尾。

第2重には南東以下の四隅に、カーリー、カーララートリー、カーラカルニー、シュヴェーターのほら貝、金剛の印のついた幡、斧、三叉戟。帯には瓶。

東以下の四門の雑色蓮華と日輪には、金剛鉤女などの金剛鉤など四つ。

13.3.19 金剛界マンダラ

金剛界マンダラについて。雑色蓮華の花芯の月輪に世尊金剛界〔大日〕の白い五鈷金剛杵。

雄しべの東以下の花卉の月輪には、順に右回りに、薩埵金剛女、宝金剛女、法金剛女、羯磨金剛女の赤い五鈷金剛杵、先端に宝のある五鈷杵、五鈷杵の印のある赤白の八葉蓮華、五如来の色の羯磨杵⁷⁶。

東以下の蓮華の花芯の月輪の形のところに、順に、阿閼、宝生、阿弥陀、不空成就の青い五鈷金剛杵、金剛宝、金剛蓮華、羯磨杵。

阿閼の蓮華の東以下の四方の蓮弁の月輪に金剛薩埵、金剛王、金剛愛、金剛喜の、順に五鈷金剛杵、金剛鉤、弓、金剛杵。宝生の蓮華の〔同様の場所に〕金剛宝、金剛光、金剛幢、金剛笑の、青い五鈷金剛杵を両端につけた宝の鬘、日輪、如意宝幢、歯の連なる金剛杵。阿弥陀の〔蓮華の同様の場所に〕、金剛法、金剛利、金剛因、金剛語の、赤い蓮華、剣、八輻輪、独鈷杵。不空成就の〔蓮華の同様の場所に〕、金剛業、金剛護、金剛牙、金

剛拳の、羯磨杵、金剛甲冑、金剛のついた牙、五鈷杵。阿閼以下のそれぞれは、第3の菩薩のシンボルは北の花弁に、第4の〔菩薩〕シンボルは西の花弁に描く⁷⁷。

南東以下の蓮華の花芯の月輪には、金剛嬉、金剛鬘、金剛歌、金剛舞の金剛杵、宝の鬘、琵琶、金剛杵。

中心の楼閣の外の帯には、東に、弥勒、不空見、一切除蓋障、一切除憂闇の、蓮華と月輪に五鈷金剛杵。南には香象、大精進、虚空蔵、智幢の、蓮華と月輪に金剛宝。西には無量光、月光、賢護、光網の、蓮華と月輪に金剛蓮華。北には金剛蔵、無尽慧、弁積、普賢の、蓮華と月輪に羯磨杵⁷⁸。

外のマンダラの南東以下の四隅の蓮華と月輪に、金剛香、金剛華、金剛灯、金剛塗の、前と同じシンボル。

東以下の門の蓮華と月輪に金剛鉤、金剛索、金剛鎖、金剛鈴のシンボル。

帯には瓶。

13.3.20 文殊金剛マンダラ

43尊からなる文殊金剛マンダラについて。外のマンダラには、青、赤、白、緑、黄色の5重の壁があり、東以下の四方と中央の区画もすべてである。第2のマンダラには青、白、黄色の3重の壁がある。第3の輪には白い一重の壁がある。

このうち、中央の黄色い区画には雑色蓮華と月輪にマンジュシュリーの黄色い柄の剣。

東以下の内院の日輪には、阿閼、宝生、阿弥陀、不空成就の青い金剛杵、宝、白い蓮華、剣。南東以下の四隅の内院の月輪にはローチャナー、マーマキー、パーンダラー、ターラーの黄色い金剛杵、青い金剛杵、白い金剛杵、緑の金剛杵。

第2重のマンダラには、東以下の四方に、月輪の上に薩埵金剛女、宝金剛女、法金剛女、羯磨金剛女の阿閼以下と同じようなシンボル。北東以下の四隅にはチンダー、ラトノールカー、ブリクティ、ヴァジュラシュリンカラーの剣、黄色い宝、白い金剛杵、緑の金剛鎖。

第3重のマンダラには、東の月輪に弥勒、文殊、香象、智幢の華のついた龍華樹の枝、剣、瓶に乗った象、黄色い如意宝。南の月輪には賢護、海慧、無尽慧、弁積の赤、白、黄色、緑の矢。西の月輪には勢至、一切滅悪趣、一切除憂闇、網明の白い蓮華、白い矢、黄色い矢、赤いウトパラの上に乗った日輪。北の月輪には月光、無量光、虚空蔵、一切除蓋障のウトパラの上に乗った月輪、赤いか目、黄色い矢、青い矢。これ場合、順に、東門以下の両側の帯に、二つずつのシンボルがある。

東以下の門の日輪にはヤマーントカ、アパラジタ、ハヤグリーヴァ、アムリタクンダリンの黒い柄の剣、黄色い金剛杵、赤い金剛棒、青い柄の剣。北東以下の四隅の日輪には

アチャラ、タッキラージャ、ニーラダнда、マハーバラの劍⁷⁹、青い金剛杵、青い金剛棒、青い金剛棒。ヤマーリのシンボルの外には、日輪の上にスンバの劍。ハヤグリーヴァのシンボルの外には、日輪に乗ったヴァジュラパーターラの金剛鉤。

日輪と月輪のすべての下には雑色蓮華がある。帯には瓶。一説では、ヤマーリのシンボルの外に、日輪に乗ったウシュウニーシャチャクリンのチャクラ。さらに [ハヤグリーヴァの] 外に⁸⁰、スンバの劍。

13.3.21 法界語自在マンダラ

<13.3.21.1>

法界語自在マンダラについて。内側の円は白い顔料で満たす。それ以外は前に同じ。

中央のマンダラの中央には雑色蓮華の花芯の月輪に、マンジュゴーシャの黄色い柄の劍。

東以下と北東以下の蓮弁と月輪には、順に大仏頂、光聚 [仏頂]、白傘蓋 [仏頂]⁸¹、最勝仏頂、捨除 [仏頂]、高 [仏頂]、高大 [仏頂]、勝 [仏頂]⁸²の八仏頂の黄色いチャクラ。

東の内院の中央には、雑色蓮華と日輪に阿閼の青い金剛杵。北東以下の四隅には雑色蓮華と月輪に、金剛薩埵、金剛王、金剛愛、金剛嬉の、金剛杵、金剛鉤、弓、金剛杵。

南の内院の中央には、雑色蓮華と月輪に宝生の黄色い如意宝幢。北東以下の四隅には金剛宝、金剛日⁸³、金剛幢、金剛笑の、五鈷杵を両端につけた宝の鬘、日輪、如意宝幢、歯の列のついた金剛杵。

西の内院の中央には、雑色蓮華と日輪に阿弥陀の赤蓮華。北東以下の四隅には雑色蓮華と月輪に金剛法、金剛利、金剛因、金剛語の、蓮華、劍、法輪、独鈷杵の先端。

北の内院の中央には、雑色蓮華と日輪に不空成就の劍。北東以下の四隅には雑色蓮華と月輪に金剛業、金剛護、金剛牙、金剛拳の、三鈷杵、金剛甲冑、金剛の印のついた牙、五鈷の金剛杵。

北東以下の四隅の内院の蓮華の月輪には、ローチャナー、マーマキー、パーンダラー、ターラーのシンボルで、マンジュゴーシャ、阿閼、阿弥陀、不空成就のシンボルと同じ。

東以下の門の雑色蓮華と日輪には、金剛鉤、金剛索、金剛鎖、金剛鈴の金剛鉤など。

<13.3.21.2>

中心のマンダラの外の第2のマンダラには、東の方角に雑色蓮華と月輪に、勝解行地、歡喜地、無垢地、発光地、焰慧地、難勝地、現前地、遠行地、不動地、善慧地、法雲地、普光地の12尊の、右回りに順に、赤蓮華、如意宝、白蓮華、雑色蓮華に乗った日輪、ウトパラ、マラカタ宝、蓮華に乗った般若波羅蜜の夾函、雑色蓮華の上に羯磨杵、茎のある

蓮華の上の月輪に乗った赤い五鈷杵⁸⁴、ウトパラの上に劍、法雲に包まれた般若波羅蜜の経函、蓮華に乗った仏像。

南には雑色蓮華と月輪に、宝蓮華、布施、戒、忍、精進、禪、般若、方便、願、力⁸⁵、智、金剛業の12の波羅蜜の、蓮華の上の月輪、さまざまな穀物の宝の鬘、つぼみの付いたアショーカ樹の花房⁸⁶、白蓮華、青ウトパラ、白蓮華、蓮華に乗った般若波羅蜜の夾函、黄色蓮華に乗った金剛杵、ウトパラに乗った劍、般若波羅蜜の夾函、さまざまな宝の実で飾られた菩提樹の蔓草、ウトパラに乗った羯磨杵。

西には雑色蓮華と月輪に、命、心、財、行、生、神通、勝解、願、智、法の十自在と、如是女、仏菩提女の12尊の、ルビーの上に乗った三昧印の無量寿仏の像、赤い五鈷金剛杵、如意宝幢、羯磨杵、さまざまな色のジャーティの蔓、蓮華に乗った日輪と月輪、プリヤングの華鬘、青ウトパラ、ウトパラに乗った劍、蓮華に乗った賢瓶、白い蓮華、黄色い蓮華に乗った五鈷杵。

北には雑色蓮華と月輪に、ヴァスマティ、ラトノールカー、ウシュニーシャヴィジャヤー、マーリーチー、パルナシャバリー、ジャングリー、アナンタムカー、チュンダー、ブラジュニャーヴァルダニー、サルヴァカルマーヴァラナヴィショードानी、アクシャヤジュニャーニャカランダー、サルヴァブッダダルマコーシャヴァティの十二陀羅尼の、穀物の房、如意宝幢、月長石の宝の瓶、糸の付いた針、孔雀の羽、毒の華の房、赤蓮華に乗った不滅の大きな宝の瓶、数珠をかけたカマンダル瓶、青ウトパラに乗った劍、三鈷杵の付いた白赤色の蓮華、宝の筐、蓮華に乗ったさまざまな宝の小箱。

東以下の門の蓮華と日輪には法無礙、義無礙、詞無礙、弁無礙の、金剛鉤、宝の索、両端に蓮華の付いた鎖、三鈷杵の付いた鈴⁸⁷。南東以下の四隅には喜女、鬘女、歌女、舞女の、金剛杵、宝の鬘、琵琶、金剛杵。

<13.3.21.3>

第三のマンダラには、蓮華と月輪に、東には普賢の蓮華に乗った劍。無尽慧の劍、地藏の蓮華に乗った如意樹、虚空蔵の宝。南には虚空蔵の如意宝、宝手の宝、海慧のほら貝、金剛蔵の金剛杵。西には観自在の蓮華、大勢至の劍、月光の金剛杵を伴った輪、網明の劍。北には蓮華と月輪に無量光、弁積、除憂悶、除蓋障の、雑色蓮華、蓮華に乗った劍、五鈷金剛杵、劍。

東以下の門の蓮華と日輪に、ヤマーンタカ、ブラジュニャーンタカ、パドマーンタカ、ヴィグナーンタカの鉤、索、鎖、鈴。北東以下の四隅の雑色蓮華と日輪に、トライローキヤヴィジャヤ、ヴァジュラジュヴァーラーナラールカ、ヘールカヴァジュラ、パラマーシュヴァの、劍、金剛杵、金剛杵⁸⁸、羯磨杵。ヤマーンタカのシンボルの外にはウシュニーシャチャクリンの黄色いチャクラ。パドマーンタカのシンボルの外にはスンバの金剛杵。

トライローキヤヴィジャヤ以下の4尊のシンボルの外には、第3のマンダラのみ、対角[線]の間に線(レーカー)を作れ。その外で、南東以下の対角線の右側には、蓮華と月輪に華女、香女、燈女、塗香女の花の筐、香の匙、灯明の宝の柄、ほら貝、[対角線の]左側にある蓮華と月輪には、金剛色女、金剛声女、金剛味女、金剛触女の、鏡、金剛の琵琶、味覚の容器、さまざまな色の衣。

<13.3.21.4>

外金剛部のマンダラでは、蓮華に、東以下の四方にはインドラ、ヤマ、ヴァルナ、クベーラの金剛杵、黒い杖、ナーガの索、鉤。南東以下にはイーシャーナ、アグニ、ナイルリティ、ヴァーユの三叉戟、杓、劍、風の布。

次にイーシャーナの外側で近いところに、北東からシンボルを順に描く。このうち、ブラフマーの数珠、ヴィシュヌのチャクラ、マハーシュヴァラの三叉戟、カールティケーヤの短劍。

ブラフマーニーの数珠、ルドラーニーの三叉戟、ヴァイシュナヴィーのチャクラ、カウマーリーの短劍、インドラニーの金剛杵、ヴァーラーヒーのローヒタ魚、チャームンダーのカルトリ。プリンギンの数珠。ガナパティの斧。マハーカーラの三叉戟、ナンディケーシュヴァラのムラジャ太鼓。

日天の蓮華に乗った日輪、月天の睡蓮(kumuda)に乗った月輪、火星の鎌、水星の矢、木星の数珠、金星の数珠、土星の黒い杖、ラーフの月、ケートゥのナーガの索。

バラバドラの鋏、ジャヤカラの花輪、マドゥカラのマカラ幡、ヴァサンタの矢。

アナンタ、ヴァースキ、タクシャカ、カルコータカ、パドマ、マハーパドマ、シャンカパーラ、クリカの合掌。もしくは、それぞれの父祖と同じシンボル。このうち、アナンタとクリカはブラーミンでアグニの息子。ヴァースキとシャンカパーラはクシャトリアでインドラの息子。タクシャカとマハーパドマはヴァイシュヤでヴァーユの息子。カルコータカとパドマはシュードラでヴァルナの息子。

ヴェーマチトリン、バリ、プラフラーダ、ヴァイローチャナなどの偉大なアスラの王たちは、劍を元とするさまざまな武器。ガルデーンドラの合掌。キンナラの王ドゥルマの琵琶。ガンダルヴァの王パンチャシカの琵琶。持明者の王サルヴァールタシダの花輪。パールナバドラ、マーニバドラ、ダナダ、ヴァイシュラヴァナ、チヴィクンダリン、ケーリマーリン、スケーンドラ、チャレーンドラの夜叉たちの、シトロンの実。ハーリーティーの穀物を持つ両手。

婁宿、胃宿、昂宿、畢宿、觜宿、參宿、井宿、鬼宿、柳宿、星宿、張宿、翼宿、軫宿、角宿、亢宿、氏宿、房宿、心宿、尾宿、箕宿、斗宿、牛宿、危宿、虚宿、室宿、壁宿、奎宿、女宿の合掌した両手の印。

ここでも門には金剛鉤以下〔の四摂のシンボル〕。第4重に瓶。

13.3.22 悪趣清浄マンダラ

悪趣清浄マンダラについて。青い金剛杵輪の内側に8幅の黄色いチャクラがあり、その中心に黄色い転法輪印。

東以下の四方には白い触地印、青い与願印、赤い禅定印、緑の施無畏印。南東以下の四隅の幅には、太陽、如意宝幢、剣、傘蓋。

金剛杵輪の外には南東以下の四隅にラースヤー以下のシンボル。東以下の四方の帯には門の左右に二つのシンボル。このうち、龍華樹、眼を伴った蓮華、鉤、杖、法螺貝、剣。蓮華に載った法の宝箱、如意宝幢、甘露瓶、蓮華に載った月輪、宝、金剛の籠、金剛杵を伴った青蓮華、甘露瓶、蓮華に載った宝、宝の鬘。南東以下の四隅には華女以下のシンボル。門には金剛鉤以下〔のシンボル〕。

37のシンボルも雑色蓮華と月輪に載る。青頸以下のシンボルは描かれない。

13.3.23 ブータダーマラマンダラ

ブータダーマラマンダラについて。白、黄色、赤、緑、黒の5つの壁。東以下の地面も〔同じ色〕。3つの線のレーカーは、白、赤、黒。一つの線のレーカーは黒。二つの金剛杵の帯のレーカーも〔黒〕。中心の区画の中央の内院には雑色蓮華と月輪に世尊ブータダーマラの青い五銚金剛杵。

東にはマヘーシュラヴァアラの日輪の上の三叉戟。南にはヴィシュヌの日輪の上のチャクラ。西にはブラフマンの月輪の上の数珠。北にはカールティケーヤの日輪の上の短剣。北東にはガナパティの月輪の上の斧。南東にはラヴィの日輪の上の蓮華に載った日輪。南西にはラーフの日輪の上の月輪。北東にはナンディケーシュラヴァアラの月輪の上のダマル。

第2重には東以下の四方に、シュリー、ティローッタマー、シャシー、ウマーの、月輪の上に白蓮華、香の容器、灯明の柄、鎌首の形をした手。南東以下にはラトナシュリー、サラスヴァティー、スラスンダリー、アーブーティーの、順に、塗香の法螺貝、ヴィーナー、宝の鬘、三銚金剛杵。

第3重には東以下の四方に、インドラ、ヤマ、ヴァルナ、クベーラの、月輪に載った金剛杵、日輪に載り、カパーラの印の付いた杖、月輪に載ったナーガの索、月輪に載った棍棒。南東以下の四隅にはアグニ、ナイルリティ、ヴァーユ、チャンドラの、日輪に載った数珠、日輪に載った剣、月輪に載った風の布、月輪上で赤蓮華に載った月輪。チャンドラのシンボルの近くにはイーシャーナの、日輪に載った三叉戟。

第4重には東以下の四方にシンハドヴァジャ、ヴィブーティ、マハーパドマヴァティー、スラハーリニーの、月輪上に、獅子の幢、鉤、矢、如意宝。北東以下の四隅にはヴァラハーリー、ラトネーシュヴァリー、ブーシャニー、ジャガットパーラニーの、月輪上に、花の箱、香炉、塗香の法螺貝、灯明の柄。この場合、月輪と日輪はすべて雑色蓮華に載る。第4重には瓶。

13.3.24 パンチャダーカマンダラ

パンチャダーカマンダラについて。中央の楼閣の中心には、明妃を伴ったヘーヴァジュラのカリトリとカパーラ。東以下の門にはガウリー、チャウリー、ヴェーターリー、ガスマリーの金剛鉤、縋索、鎖、鈴。東北以下の四隅にはプッカシー、シャバリー、チャンダリー、ドーンビーの菩提心の瓶、メール山、火炉、大きな幢幡の旗。

その次に、東の楼閣の中心には、シャーシュヴァタのカパーラに乗ったクジャク。東以下の門には、サムダンシャー、パーシニー、ヴァーグラ、アंकシャダーリニーのペンチ、縋索、毘、鉤。東北以下には、華女、香女、燈女、塗香女の花の器、香炉、灯明の柄、黄色い塗香で満ちたほら貝。

南の楼閣の中心には、ヴァジュラスーリヤのカパーラに乗ったカーランダヴァ鳥、東以下の門にはスーリヤハスター、ディーパー、ラトノールカー、タディトカラーの日輪、灯明の柄、宝、稲光、東北以下には、嬉女、鬘女、歌女、舞女の金剛杵、宝の輪、シンバル、金剛杵。

西の楼閣の中心には、パドマナルテーシュヴァラのカパーラに乗った犬。東以下の門には、パドマー、ダルモーダヤー、スポーター、シュヴァーシュレーシャーの蓮華、法源、鎖、金剛杵。北東以下にはヴァンシャー、ヴィナー、ムクンダー、ムラジャーのそれぞれの楽器。

北のマンダラ⁸⁹の中心には、パラマーシュヴァのカパーラに乗った犬。東以下の門には、ターラー、クンチー、カパーター、パタダーリニーの門、鍵、門扉、幕。北東以下には、ローチャナー、マーマキー、パーンダラー、ターラーのチャクラ、金剛杵、蓮華、ウトパラ。

外の大マンダラの門にはガウリー以下のシンボル。北東などにはプッカシーなどのシンボル。

これらのすべてのシンボルは、雑色蓮華と日輪に乗る。シャーシュヴァタのシンボルのみは月輪の座に乗る。それぞれのマンダラには甘露瓶。〔甘露瓶は〕大マンダラのみという説もある。

13.3.25 六転輪王マンダラ

六転輪王マンダラについて。シンボルは雑色蓮華と日輪の上に乗る。ブッダダーカの [シンボル] のみ月輪に乗る。六つの楼閣の四隅に雑色蓮華に乗ったカパーラ。

このうち、中央のマンダラの中央の蓮華には金剛薩埵の金剛杵。四隅の蓮華にはダーキニー、ラーマー、カンダローハー、ルーピニーのダマル太鼓。東以下の門には左回りに、南東以下の四隅には右回りというのがこのマンダラの [シンボルの] 配置の順序である。門の蓮華にはカンダカパーラとプラチャンダー、マハーカンカーラとチャンダークシー、カンカーラとブラバーヴァティー、ヴィカタダンシュトリーとマハーナーサーの四つの金剛杵。円の中心には金剛杵輪。

ブッダダーカのマンダラの中央の蓮華にはチャクラ、門の蓮華にはスラーヴァリとヴィーラマティー、アミターバとカルパリー、ヴァジュラプラバとランケーシュヴァリー、ヴァジュラデーハとドゥルマチャーヤーの [四つの] チャクラ。円の中央にはチャクラの輪。

ラトナダーカのマンダラでは、中央に宝。門の蓮華にはアンクリカとアイラーヴァティー、ヴァジュラジャティラとマハーバイラヴァー、マハーヴィーラとヴァーユヴェーガー、ヴァジュラフームカーラとスラーバクシーの宝。円の中央には宝の輪。

パドマダーカのマンダラでは、中央に蓮華。門の蓮華にはスバドラとシュヤーマデーヴィー、ヴァジュラバドラとスバドラ、マハーバイラヴァとハヤカルナー、ヴィルーパークシャとカガーナナーの蓮華。円の中央には蓮華の輪。

ヴァジュラダーカのマンダラでは、中央に金剛杵。門の蓮華にはマハーバラとチャクラヴェーガー、ラトナヴァジュラとカンダローハー、ハヤグリーヴァとシャウンディニー、アーカーシャガルバとチャクラヴァルミニの金剛杵。円の中央には金剛杵の輪。

ヴィシュヴァダーカのマンダラでは、中央に羯磨杵。門の蓮華にはヘルカとスヴィーラー、パドマナルテーシュヴァラとマハーバラ、ヴァイローチャナとカヴァルティニー、ヴァジュラサットヴァとマハーヴィールヤーの羯磨杵。円の中央には羯磨杵の輪。

大楼閣の門には、カーカースヤー、ウルーカースヤー、シュヴァーナースヤー、スカラースヤーの金剛鉤、縋索、鎖、鈴。四隅にはヤマダーディー、ヤマドゥーティー、ヤマダンシュトリー、ヤママタニーの鏡、ヴィーナー、塗香のほら貝、味覚の容器。瓶は適宜 [描け]。

<13.3.26>

このように述べたところに従って、ほかのマンダラについても彩色を考察せよ。多言をおそれて、ここでは説明しない。

13.3.27 時輪マンダラ

<13.3.27.1>

一方、時輪マンダラの場合、すでに述べた彩色の順序とはおおむね異なるので、彩色の色の順序を述べよう。

身密マンダラの内側の区画で、第2の金剛杵輪の内側はすべて黒である。身口意の三密のマンダラの東の区画はすべて黒。南は赤。西は黄色。北は白。ヴェーディーは白。宝の帯は赤。そこにさまざまに宝石を描く。瓔珞半瓔珞の区画は黒。そこには白い瓔珞半瓔珞。バクリーは黒い地に白く描く。外廊は黒い地に白。トーラナの柱は黄色。

一方、意密マンダラについては、中心の蓮華は緑、ただし、息災などの場合、白などになる⁹⁰。金剛杵輪⁹¹と16の柱⁹²は黒。東には黒い剣、南には赤い宝、西には黄色のチャクラ、北には白い蓮華を加える。8つの瓶は蓮華に乗り、白で、蓮華を口に飾る。いずれの場合も蓮華の座の3分の1が花芯である⁹³。第2の金剛杵輪は緑。尊格の帯は白。壁の3つの帯は内側から順に白、赤、黒。これらの区画はさらに9分割され、このうち1つ分離れて、帯がそれぞれ2つ分ずつ占める⁹⁴。門と門扉の接するところには、金剛杵と宝がちりばめられる⁹⁵。12のトーラナはさまざまな色である⁹⁶。

口密マンダラでは尊格の帯は白。そこにある8つの蓮華は月輪や日輪を欠き、四方は赤、四隅は白。内側から緑、黒、赤、白、黄色の5色のレーカー。この区画は15等分され、ここも前と同様のレーカー⁹⁷。

身密マンダラでは尊格の帯は白。そこにある蓮華は月輪や日輪を欠く。5色のレーカーは口密マンダラと同様である。

<13.3.27.2>

トーラナ⁹⁸の柱の下にあるヴェーディーの場所には8つの蛇蓋を持つもの(=ナーガ)があり、それぞれ12マートラである。このうち、東には二つの黒い円の上に二つの幢旛。南には二つの赤い三角の上に卍の印。西には二つの黄色い四角の上に金剛杵の印。北には二つの白い半月に蓮華の印。東の右の円の右側には龍王の「勝利」といわれる甘露瓶。西の左の四角の左側には「最勝」といわれる甘露瓶。

東のトーラナには、初めの段のマッタヴァーラナの上の中央の四角に黒い法輪。その左右に黒い牡鹿と雌鹿。南には、赤い色の賢瓶。その左右に赤いほら貝と蓮華。西には黄色い菩提樹。その左右に黄色いキンナラと雌キンナラ。北には白い太鼓。その左右には白い杖と槌。外廊と地輪のあいだの区画は黒で、そこには供養の品々を適宜描け。

地輪(は黄色。そこの北東の隅には、12マートルの昇る満月。南西には12マートルの沈む太陽。水輪は白。火輪は赤。風輪は黒。火輪と風輪の両者のあいだには、それぞれ12マートルの屍林の八輻輪が8つ。四方のものは赤、四隅のものは白。東の輪の外側には空のマンダラ。西の輪の外側にも空のマンダラ。二つの空のマンダラは、[『無垢光』の]「成就の章」⁹⁹で説かれた方法で描く。

[8つの八輻輪と2つの空のマンダラの]10カ所にもシンボルはカルトリ。風輪にはさまざまなシンボルが描かれる。ここでは好きなようにはない¹⁰⁰。虚空輪は黒。その両側から3マートルずつ[内側に]取って、そこに二つの円¹⁰¹。中央の6マートル分は緑で、金剛杵輪を作る¹⁰²。火炎輪は五色¹⁰³。

<13.3.27.3>

また、高さは中心のマンダラ(=意密マンダラ)では東が黒で、4分の1ヤヴァ、南が赤で[4分の]2、西が黄色で[4分の]4、北が白で[4分の]3¹⁰⁴。

壁のレーカー¹⁰⁵の高さは黄色い顔料の3倍(=3ヤヴァ)。金剛杵輪¹⁰⁶も[同じ]。その他のレーカーは黄色い顔料の2倍(=2ヤヴァ)。蓮華¹⁰⁷はパッティカー¹⁰⁸の2倍。月輪と日輪¹⁰⁹の[高さは]蓮華のレーカーの[2倍]。このように述べた[意密マンダラの]高さよりも、口密マンダラでは2倍の高さ、身密マンダラではさらにその2倍。外廊から外の供養の区画は1ヤヴァ¹¹⁰。地輪以下の区画と、[虚空輪の]二つの円の高さも、身密マンダラの壁のレーカーの大きさである。その他の顔料の彩色は、すべて2倍になっているということにしたがって、すべての区画において共通である。金剛壇の3倍が3つの輪の大きさである¹¹¹。

<13.3.27.4>

この場合、主尊の[蓮華の]花芯には花芯があり、同じ大きさの白と赤の月輪と、黒と赤の日輪と、ラーフ、劫の炎のマンダラの上に、世尊カーラチャクラの青い三鉷金剛杵。

東の蓮弁には黒い香炉。南には赤い灯明。西には黄色いほら貝。北には白い食物。南東以下には黒、赤、白、黄色の払子。その外には北東には法の白いほら貝。南東には黒い如意宝。南西には法の赤いガンディー。北西には黄色い如意樹。

第2重には東の白い蓮華と日輪に黒い剣。南東の赤い蓮華と月輪には青いウトパラ。南の白い蓮華と日輪には赤い九部の宝。南西の赤い蓮華と月輪には赤い蓮華。西の白い蓮華と日輪には黄色いチャクラ。北西の赤い蓮華と月輪には黄色いチャクラ。北の白い蓮華と日輪には白い蓮華。北東の赤い蓮華と月輪には白いウトパラ。

第3重には、帯のところにそれぞれの門の両側に二つずつなので8つの蓮華。このうち6つには日輪がある。西と北の門の左側には[蓮華の上に]月輪。四隅は蓮華と月輪が四

つ。これらには、北東からはじめて、鏡、金剛杵、剣、衣、金剛杵、宝、味覚器、法源、チャクラ、香のほら貝、ヴィーナー、蓮華。〔色は〕白、黒、黒、黒、緑、赤、赤、緑、黄色、黄色、青、白。東の門の蓮華と日輪には黒い剣。南のには赤い杖、西のには黄色い蓮華。北のには白い槌。この場合、日輪は白い蓮華に乗る。月輪は赤い蓮華に乗る。

東のヴェーディーにはトーラナの柱の根本の左側に黒いほら貝、右側には青い花輪。南のには赤い香炉と灯明、西には黄色い王冠と黄色い瓔珞。西には白い実と白い甘露で満ちた容器。すべてのヴェーディーにはいろいろなものを持った供養女。東のトーラナの供養女の場所の中央には衣、南のには蓮華、西のにはパタハ太鼓、北には金剛杵。

<13.3.27.5>

一方、口密マンダラでは、東の蓮華に花芯と蓮弁に、黒いカルトリ。南東の〔蓮華の花芯と蓮弁〕には黒いチャクラ。南のには赤い杖。南東のには赤いシャクティ。西のには黄色い金剛杵。北西のには黄色いブラフマンの杖の先。北のには白い三叉戟。北西のには白い蓮華。

身密マンダラでは、パッティカーにある蓮華の花芯と蓮弁にシンボルがある。このうち、東の門の右側には剣。南東には如意樹。南門の左側には金剛杵の付いた杖。右側にはシャクティ。南東にはシャクティ、あるいは槍。西門の左側には宝か棍棒。右側には金剛杵。北西には針。北門の左側には三叉戟。右側には羂索。北東には斧。東門の左にはチャクラ。

東門には杖。その外に緑の金剛杵。南門には赤い矢。西門には黄色い槌。その外には青い三叉戟。北門には白い棍棒。これらの杖などのシンボルは蓮華と日輪に乗る。

口密マンダラと身密マンダラの四方には赤い蓮華、四隅の蓮華は白。この場合、口密マンダラのヴェーディーには東〔のヴェーディーの上〕で、門の右側にはウトパラ、衣、カリトリ、チャクラ、カトヴァーンガで、いずれも黒。左側にはカルトリ、剣、カルトリ、カルトリで、いずれも黒。南〔のヴェーディーの上〕で、門の右側には蓮華、味覚器、杖、シャクティ、蓮華で、いずれも赤。左側には矢、斧、カルトリ、カルトリでいずれも赤。西〔のヴェーディーの上〕で、門の右側にはチャクラ、香のほら貝、金剛杵、針、チャクラで、いずれも黄色。左側には緑の法源と、チャクラ、カルトリ、カルトリでいずれも黄色。北〔のヴェーディーの上〕で、門の右側にはウトパラ、鏡、三叉戟、蓮華、ウトパラでいずれも白。左側には青いヴィーナーと、槌、カルトリ、カルトリでいずれも白。上の36のシンボルは身密マンダラのヴェーディーにもある。

13.4 終結

次に、文殊金剛以下のいずれかが描かれたマンダラが、すべての形態が明瞭になったと

理解し¹¹²、「フーム」字と「アムリタ」クンダリのマントラを唱え、五甘露を含んだ香水で、マンダラの外を濡らし、それを唱えた水をチャクラに散布し、残りの顔料に「オーム、アーハ、フーム、金剛よ、ムッフ」と「唱えて」知恵の顔料にお帰りにいただく。容器に残った顔料は人のいないところに安置せよ¹¹³。以上、彩色の儀軌。

訳註

¹ Durjayacandra, *Suparigraha nāma maṇḍalopāyikāvidhi*, TTP, No. 2369, Vol. 56, 146.3.3. [NRC 131.3]

dmar po'i gos gyon gtor ma sbyin //

² SUT, Ch. 17, v.33cd-34 (Tsuda 1974: 123, 205). [NRC 131.3]

pūrveṇa tu mahāśvetam dakṣiṇe pītasamṃyutam //
 lohitaṃ paścimaṃ bhāgaṃ marakataṃ uttrasamṃyutam //
 madhyato bhūmibhāgaṃ tu indraṇīlaprabhāsvaram //
 shar phyogs su ni dkar po che // lhor ni ser po yang dag ldan //
 nub kyi cha ni dmar po ste // byang du mar gad yang dag ldan //
 dbus kyi sa yi cha nyid ni // in dra nī la 'od 'bar ba'o //

SSGT, TTP, No. 429,46.1.7-2.3 (伊藤 2000: 34, 36). [NRC 131.3]

m khas pas lcags ni mnam lnga 'am // phye ma dkar po la sogs pa'am //
 dad cing yon tan ldan pa yi // slob mas rin chen phye mas bri //
 rin chen lcags mams ma 'byor na // sā lu btags pa'i phye mas bya //
 tshon rtsi lngar bshad zhib mo dang // 'byung khungs nas byung phye ma dang //
 rdo yi khams ni sna tshogs dag // phye ma'i las la sbyar bar bya //
 de ltar mnam pa bzhi po dag // phye ma'i rgyur ni bsgrags pa yin //
 lcags mams kun dang rin chen dang // 'byung khungs sa dang 'bras btags pa //
 dkyil 'khor kun gyi las mams la // phye ma'i don du sbyar bar bya //
 yang la las gyi cho ga la // phye ma dmar po so phag bsregs //
 nag po thal ba dkar po ni // nas dang dro las byas pa gngang //
 bya ba rings pa 'byung ba dang // bgegs mams tshar bcad bya ba dang //
 drag shul spyad pa'i las dag gi // dkyil 'khor las la thal ba gngang //
 dkyil 'khor gyi ni cho ga la // phye ma'i rgyu ni sngar bshad pa //
 kun kyang rung ste khyad par du // dang po la sogs rim bzhi shis //
 dam tshig las la lcags kyi bzang // rin chen las byung dbang bskur la //
 sā lu'i phye ma zhi ba la // 'byung khungs las byung rgyas pa la //
 drag shul spyod la khyad par du // thal ba la sogs bya bar shis //
 de ni phye ma'i cho ga'i rim // khyad par dang bcas bstan pa yin //

『○○耶經』(大正藏 第897番 第18卷、pp. 764c-765a)

然後方起而作畫之。用其五鐵以爲彩色。最爲勝上。或用五寶。若無五鐵及五寶者。即用粳米粉。色數如前。極須微細。或用石末。所用彩色總有四種。謂鐵及寶粳米及石末。凡諸曼荼羅常用之色。或若不辨此等色者應用燒土以爲赤色。炭爲黑色。大小麥末爲作餘色。若作速急之時。及碎伏魅并作降伏法者。應用灰作曼荼羅。於諸彩色。五鐵五寶粳米粉三色。隨所用處各自爲上。若作三摩耶

曼荼羅。應用五鐵。若作灌頂曼荼羅。應用五寶。若作息災應用粳米粉。若作增益當用石末色。若作降伏當用其灰。此名彩色差別等相。

³ Skt. jaṅgama. 動物性の何らかの素材か。

⁴ チベット訳は「ブルーム」 (bhrūm)。2行下の種子も同様。

⁵ <12.1.2>参照。

⁶ この部分は智薩埵と三昧耶薩埵の合一の方法と同じである。森(2000)参照。

⁷ マンダラの彩色のために顔料を準備する段階で、このマントラが唱えられることは経典やマンダラ儀軌類にしばしば見られる。たとえば堀内(1983: 387)、密教聖典研究会(1987: 46, 48)。

⁸ (虚空におすえした・・・108回唱えよ)

Kambala, *Śrīcakrasaṃvaramaṇḍalopāyikā-ratnapradīpodyota*, TTP, No. 2161, Vol. 51, 194.2.6-3.1.[NRC 131.4]

de las rin po che las byung ba'am / lcags lnga las byung ba'am / kham pa (P. khams) las byung ba'am
// 'bras sā lu las byung ba la sogs pa'i rdul tshon lnga gnod lngar bzhag pa (P omits pa) la rtag (P. brtag) pa
la sogs pa'i sa bon bkod de / ye shes kyi rdul tshon bkug nas / gzi brjid bskyed nas / om vajracitrasamayē
hūm / zhes bya ba 'dis bla mas mngon par bsngags te / dkyil 'khor gyi ye shes kyi thig om vajravega
mātikrama hūm zhes brjod pas (D pa'i) yid kyi nam mkha' la bteg nas / 'khor lo'i nang du 'dug la /

⁹ チベット訳は「ヒー」。

¹⁰ (顔料が衆生に潤沢であれば・・・輝くのである)

Tathāgatavajra, *Śrīsaṃvaramaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2226, Vol. 52, 79.5.4-5. [NRC 131.4]

bden pa gang gis sems can mams rdul (D inserts tshon) mang zhing sangs rgyas bcom ldan 'das mams
sems can mams la chags pas rjes su chags pa'i bden pa des rdul tshon mams 'bar bar gyur cig ces bden
pa'i byin gyis brlab kyi sbar bar bya'o //

¹¹ (右手に金剛杵を持ち、左手は金剛拳を取り)

SSGT, TTP, No. 429, Vol. 9, 46.3.4-5(伊藤 1990: 38).[NRC 132. 1]

rdo rje khu tshur sbyor ba 'am // yang na lcags kyu'i phyag rgya 'am //
lung bzed rgya yi (NRC phyag rgya'i) sbyor ba 'am // yang na rig byed lag pas bri //

¹² このマントラは『真実撰経』に含まれる (堀内 1983: 528)。

¹³ (この法界は清浄にして・・・右回りに顔料を塗れ)

Dārikapāda, *Śrīcakrasaṃvaramaṇḍalavidhi-tattvāvatāra*, TTP, No.2146, Vol. 51, 167.1.2-3. [NRC 131.5]

shar du kha bltas g'yon pa yi // khu tshur gyis ni bzung nas su //
bden pa brjod cing bri bar bya //
'di ni me long dag pa ste // sems can khams ni sgrol byed pa //
dpal ldan bde chen rgyal po ste // de bzhin gshegs pa kun gyi gnas //
om vajracitrasamayē hūm // lan lnga ru ni brjod par bya //
sor ni bcu gnyis tshad ldan par // drang zhing mtho la snyoms pa dang //
nas gang gyis ni ma 'dres pas // ri mo kun tu bri bar bya //

Prajñāraṅgita, *Śrīcakrasaṃvaramaṇḍalavidhi-saṃgraha*, TTP, No. 2186, Vol. 51, 265.1.3-4. [NRC 131.5]

'di ni chos dbyings dag pa ste // sems can khams ni sgrol mdzad pa //
rdo rje sems dpa' rgyal po che // de bzhin gshegs pa kun gyi (P. gyis) gnas //
me long la sogs rim brjod nas // dkar dang ser dang dmar dang ljang //

kun gyi nang rol nag po ru // mtshon gyi cha ni rim bzhin dgye //
 VPT, TTP, No. 11, Vol. 1, 232.2.4-5. [NRC 131.5]
 de la 'di ni rdul tshon bri ba'i dam tshig ste /
 'di ni chos dbyings dag pa ste // sems can khams ni thar bar byed //
 khye yi rdo rje rgyal po ches // dkyil 'khor dam pa bzhengs par bya //
 Tathāgatavajra, *Śrīsaṃvaramaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2226, Vol. 52, 79.5.8-80.1.1.
 'di ni chos dbying dag pa ste // sems can khams ni rab sgrol mdzad //
 rang nyid rgyal po rdo rje 'chang // de bzhin gshegs pa kun gyi gnas //
 nyes pa kun las nmam par grol // 'khor lo'i nang du yang dag gnas //
 Dīpaṅkarabhadra, *Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2728, Vol.65, 40.1.8-2.1.
 'di ni chos dbying dag pa ste // sems can khams ni grol byed pa //
 'jam dbyangs rgyal po rang nyid ni // de bzhin gshegs pakun gyi gnas //
 nyes pa kun las rab grol ba'o // 'khor lo'i nang na yang dag gnas //

¹⁴ (外からは阿闍梨か、あるいは絵師などが安楽な方法で)

VDT, TTP, No. 18, Vol. 2, 134.3.8-4.1. [NRC 132.1]
 g'yon pa'i rdo rje khu tshur ni // lte bar bzhag ste gzung bar bya //
 de yi 'og tu ci bder bya //

『大日経』大正蔵 第848番 第18巻、p. 9a. [NRC 132.1]

古佛所宣説是名爲色義 先安布内色非安布外色

¹⁵ (顔料は] 門の20分の1の厚さで・・・「突き刺し」が起こる)

VDT, TTP, No. 18, Vol. 2, 134.4.8-5.2. [NRC 132.2]
 de nas slob mas ci dgar dgye // tshon rtsi re re'i zhing (D. zhed) du ni //
 sgo yi nyi shu cha yi tshad // gal te tshon rtsi mi mnyam zhing //
 yo dang dma' bar gyur na ni // ri mo dma' bas dngos mi 'grub //
 yon po gdung ba bskyed (D. skyed) byed pas // dpangs (P. spangs) ni mthe'u chung gang tsam du //
 mtho zhing drang bar bri bar bya // de la sbom na nad 'byung te //
 dma' na nor ni zad par 'gyur // yon pos phan tshun sdang 'gyur te //
 chad na bla ma slob ma dag // gnyis (D. gnyi) ga 'chi bar shes par bya //
 g'yas skor ma yin bris na ni // rdul tshon phur bus btab par 'gyur //

Dīpaṅkarabhadra, *Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2728, Vol.65, 40.2.2-3. [NRC 132.2]

sgo yi nyi shu cha ru ni // ri mo mnyam par dgye bar bya //
 sbom por bkye bas nad kyis 'debs // phra mos nor ni nmam par 'jig //
 yon pas nmam 'gras chad pa yis // bla ma dang ni slob ma 'chi //
 g'yas bskor min par bkye ba yis // tshon rtsi phur bus btab par 'gyur //

Śrīdhara, *Śrīraktayamārimaṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2880, Vol. 57, 19812. [NRC 132.3]

re khā sgo'i nyi shu char mnyam par sbom pra la sogs skyon mtha' dag dang bral bar dgye bar bya'o // de
 la sbom por dgye (P. bgye) na nad do //

SSGT, TTP, No. 429, 46.2.4-6(伊藤 2000: 38). [NRC 132.3]

byang shar mtshams nas brtsams nas su // ...
 tshon rtsi nag po dge bar bya // (NRC phye ma dag ni dge bya bya)

g'yas su bskor zhing rgyun mi bcad (P 'chad) // thams cad mnyam zhing bar chad med //
ngan pa dang ni nyams pa dang // ma snyoms pa dang bar chad na //
gnod pa mang po 'byung bar 'gyur // de bas nan tan cher byas te //
mkhas pas phye ma dgye bar bya //

『○○耶經』 (大正藏 第 897 番 第 18 卷、p. 765a)

從東北角而下彩色。極令端直。右繞而布。勿令隔斷。其色界道若有龜細。或復斷絕及不齊正。種種難起。是故應當慇懃布色。

Dārikapāda, *Śrīcakrasaṃvaramaṇḍalavidhi-tattvāvatāra*, TTP, No.2146, Vol. 51, 167.1.3-4. [NRC 132.3]

sbom bos nad (P. nas) bskyed phra bas ni // nor nams rab tu brlag par byed //
'dres pa yis ni rims 'byung zhing // yo bas nmam 'gras chad pa yis //
slob dpon dang ni slob ma dag (D. dang) // 'chi ba nyid du shes par bya //
de nas tshad dang ldan pa ru // rab tu 'bad de bri bar bya //

Kṛṣṇa, *Bhagavacchrīcakrasaṃvaramaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2164, Vol. 51, 212.1.5-6. [NRC 132.3]

drang la mtho ba yang dag bri // gal te ri mo mi mnyam par //
yo zhing dma' zhing chad pa 'am // ri mo dma' bas mi 'grub cing //
yon po gdung ba bskyed byed pa // chad pas slob dpon slob ma dag //
gnyis ka chi bar shes par bya // de bas mtshan ldan ri mos ni //
mtshan nyid kun gyis mtshan par bya //

Saraha, *Śrībuddhakapāla nāma maṇḍalavidhikrama-pradyotana*, TTP, No. 2529, Vol. 58, 107.3.8-4.1. [NRC 132.2]

gal te ri mo mi mnyam zhing // yo zhing dma' dang chad pa yang //
ri mo dma' bas mi 'grub cing // g'yon pos gdung ba skyed par byed //
chad pas slob dpon slob ma dag // gnyis ka 'chi bar shes par bya //
de phyir mtshan ldan ri mo ni // mtshan nyid kun gyis lags par mtshan //

Tathāgatavajra, *Śrīsaṃvaramaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2226, Vol. 52, 80.1.1-5. [NRC 132.4]

blo dang ldan pas me mtshams nas lag pa g'yon pas g'yon skor gyis dkar po dang / ser mo dantg / dmar po
dang / ljang gu dang / nag po'i tshon nams phyi rol nas brtsams te kha shar du phyogs pas *om vajracitra
samaya hūṃ* zhes brjod cing bri bar bya'o // ...

sgo yi nyi shu cha ru ni // re khā mnyam por dgye bar bya //
sbom por bkye bas nad 'byung zhing // phra mo (P. mor) yis ni nor nams nyams //
yon po yis ni nmam par sdang // chad na bla ma slob dpon 'chi //
g'yas skor du ni bkye ba yis // tshon nams phur bus btab par 'gyur //
grub pa'i rgyur mi 'gyur pa'o //

Prajñāsī, *Abhiṣekavidhi*, TTP, No. 2425, Vol. 57, 23.1.3-5. [NRC 133.4]

de nas jlang gu mtho gang tsam du bri bar bya'o // de yang *om vajracitra prasara hūṃ* zhes brjod cing
bri'o // de nas gser gzhong la sogs pa (D. pas) bkab la / me tog gis mtha' ma bskor la gzhag (P bzhag) go //
de nas pra bzang na / e ma'o zhes brjod / ngan na rdul tshon la bgegs bstims la phur bus dgab /

Padmavajra, *Hevajramaṇḍalakarmakramavidhi*, TTP, No. 2348, Vol. 56, 88.3.1-2. [NRC 132.4]

de nas byang shar mtshams nas / bla mas rim bzhin du / nag po dang dkar po dang ser bo dang dmar po
dang / ljang gu'i re khā lnga mnyam por mtho gang du drangs la mchod pa dbul zhing / re khā me tog sil

ma gtor ro //

- ¹⁶ (真理の御心と結びついていない者たちに・・・形を取ったものである)

Nāgabuddhi, *Śrīguhyasamājamaṇḍalopāyikā-viṃśatavidhi*, TTP, No. 2675, Vol. 62, 14.5.5-6. [NRC 132.5]

atatvāśayayogānām ye doṣā raṅgapātane /
sutatvāśayayogānām nāptaṃ vighnāya ka[rhicit] //
maṇḍalāni yathātathyam kaḥ sa[r]thaḥ prakalpitum /
svādhidaivatayogeṇa siddhā maṇḍalakalpanā // (Tanaka 2000: 150)
de nyid bsam min sbyor ldan la // tshon rtsi 'gyed pa'i skyon gang dang //
de nyid bzang bsam sbyor ldan la // nam yang bgegs byed nus ma yin //
dkyil 'khor yang dag ji bzhin du // rab tu brtag par su yis nus //
rang lhag lha yi rnal 'byor gyis // dkyil 'khor brtags pas 'grub par 'gyur //

- ¹⁷ 出典不明。

¹⁸ このマントラは『真実撰経』（堀内 1983: 388）やSVU（密教聖典協会 1987: 50）に含まれる。

- ¹⁹ (金剛の威力によって・・・入れ。もしくはマンドラから出よ)

Kambala, *Śrīcakrasaṃvarābhisamayaṭīkā*, TTP, No. 4661, Vol. 82, 194.2.8. [NRC 133.1]

dkyil 'khor gyi ye shes kyi thig om vajravega mātīkrama hūm zhes brjod pas (D. pa'i) yid kyiis nam mkha'
la bteg (P. gteg) nas /

Jayasena, *Śrīḍākārnavatāntrābhiṣekavidhi*, TTP, No. 2235, Vol. 52, 135.3.7-8. [NRC 133.1]

tshon rtsi 'gyed pa'i dus su ni // ye shes thig ni nam mkha' la //
rtsa ba'i sngags brjod nas bteg ste // bri ba zin nas phab la bstim //

- ²⁰ 秘密集会マンドラの場合、大日、宝生、阿弥陀、不空成就、阿閼の順になるので、白、黄色、赤、緑、黒の色が外から内に向かって塗られることになる。

VDT, No. 18, Vol. 2, 134.4.7-8 [NRC 132.1]

dkar dang ser dang dmar dang lñang // kun gyi nang rol nag po ru //
tshon gyi cha ni rim bzhin dgye //

- ²¹ マンドラの尊格はそれぞれの部族主の姿が印として額に示されてている。中央と四方の尊格が五仏であれば、それぞれの色は自明であるが、その他の尊格の場合、所属する部族の色がここでは指示されている。

²² Dīpaṅkarabhadra, *Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2728, Vol.65, 40.2.2-6. [NRC 132.5]

sgo yi nyi shu cha ru ni // ...
ri mo phan tshun nas gang gis // ma reg par ni bri bar bya //

Śrīdhara, *Śrīraktayamāriṃamaṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2880, Vol. 57, 198.1.2-3. [NRC 132.5]

re khā sgo'i nyi shu char ... bar du nas tsam gyi re khā dgye par bya'o //

Prajñāraṅgita, *Śrīcakrasaṃvaramaṇḍalavidhi-saṃgraha*, TTP, No. 2186, Vol. 51, 265.1.5. [NRC 132.5]

tshon rtsi re re'i zheng (D. zhing) du ni // sgo yi nyi shu cha yi tshad //
phan tshun bar du nas re tsam // mtho la drang bar bri bar bya //

なお1ヤヴェ、門の大きさ（4マートラ）、1ハスタなどの対応は<12.1.3>ですすでに言及されている。

- ²³ 前の段落のはじめの文章の場合を指す。チベットで一般にみられるマンドラは、この指示の通り、ラトナの区画は赤、瓔珞半瓔珞の区画は黒がそれぞれ地の色である。

²⁴ この部分は意味がよくわからない。前の段落で「四方と中央に別の尊格をお据えする場合」と指示されたことを受けて「第2の説の場合」といつているのか。ラトナの帯ははじめの如来の色、瓔珞半瓔珞の区画は最後の如来の色を塗るという指示か。

²⁵ アンタラーラが「暗黒の帯」と呼ばれることは<12.2.1>にも現れる。

²⁶ 「アーサーラ」は門の上部のアンタラーラの内側の区画で、ラジャスとつながる部分。墨打ちでは<12.2.1>で言及されている。

²⁷ Jayabhadrā, *Śrīcakrasaṃvaramaṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2192, Vol. 51, 281.6.4-5.

rdul tshon shar dang byang dang ni // nub dang lho phyogs nyid du ni //
de la sogs pa phyogs kyi cha // zhal gyi mdog tu bri ba'o //

²⁸ 法源はその端の線のみが、蓮弁と金剛杵輪の間の線としてマンダラには表現されるため、「法源の部分の線」と述べられるのであろう。

²⁹ 法源の線が鉄圀輪であるという説はすでに<12.2.7>で示されている。鉄圀輪が水晶でできているか、金でできているかで、その色が異なる。

³⁰ 実際のマンダラでは外周部と楼閣の間の地の部分となる。

³¹ 金剛牆はマンダラを観想するとき、金剛地、金剛籠などと一緒にマンダラの周囲を形作る。金剛牆がマンダラ全体を囲む円筒形のような形態をしていることが、ここからわかる。

³² Dīpaṅkarabhadra, *Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2728, Vol. 65, 40.1.6.

rdzogs sangs ye shes sku yin phyir // chos sku'i bdag nyid shin tu dag //
gsung dbang rdo rje'i rigs su bshad // 'di ni thugs kyi 'khor lo yin //

³³ Dīpaṅkarabhadra, *Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2728, Vol. 65, 40.2.2.

dkar dang ser dang de bzhin dmar // ljang gu dang ni nag po nyid //

³⁴ 出典不明。同一の偈が NPY の第1章に現れる (Bhattacharyya 1972: 4, 森 1994: 133)。

³⁵ すでに<13.2.1>で述べた、マンダラの主尊を変更した場合、ラジャスの5色の順序が変わることを、ここでは具体的に説明している。すなわちジュニャーナパーダ流の文殊金剛マンダラの主尊が文殊金剛から語金剛に変更される。GSTには第16章で「語金剛マンダラ」が説かれ、中尊には無量寿が置かれている (Matsunaga 1978: 86, 松長 1998: 159-160)。

³⁶ この部分は意味がよくわからない。金剛薩埵は阿閼と同体であるので、黒を壁の一番内側に塗るという説と、白でよいという説があるのか。この2尊が同体であることは NPY にも示されている (森 1994: 130)。

³⁷ 対角線はマンダラを中心からそれぞれ四隅にのびる線で、これによって楼閣は4つの区画に分割される。四方を塗り分けるのは根本線に囲まれた中だけで、その外側の楼閣の外壁は四方で共通である。

³⁸ Dīpaṅkarabhadra, *Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2728, Vol.65, 40.2.5. [NRC 133.5.5]

dbus kyi sa gzhi'i cha dag ni // indra nīla'i 'od gsal 'bar //

Śrīdhara, *Śrīraktayamāriṃamaṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2880, Vol. 57, 198.1.4. [NRC 133.5.6]

indra nīla 'od 'bar ldan // dbus kyi sa gzhi yang dag bri //

³⁹ この文章はサンスクリット写本では韻文とみなされていない。

⁴⁰ Skt. nemi. 車輪の実際の輪の部分。

⁴¹ ラジャスの色の順の規定。

⁴² 屋根は実際のマンダラでは描かない。前の段落では「観想上のマンダラでは」とことわってから屋根の色の説明をした。

⁴³ SSGT, TTP, No. 429, 46.3.3-4 (金本 2003 22-23). [NRC 134.2]

dkyil 'khor dag gi cho ga ni // mam par gsum po ma lus la //
lha nams thams cad dgod pa ni // mam pa gsum du rab tu bshad //
dang po gzugs su bri bar bshad // gnyis pa dag ni phyag rgya bri //
gsum pa stan dang gnas dag tu // bri ba'i cho ga yongs su bsgrags //

『○○耶経』 (大正蔵 第 897 番 第 18 卷、p. 765a)

其畫尊法總爲三種。隨取一處作曼荼羅。一者畫尊形像。二者畫作其印。三者但置其座。

⁴⁴ Nāgabuddhi, *Śrīguhyasamājamaṇḍalopāyikā-viṃśatīvidhi*, TTP, No. 2675, Vol. 62, 12.2.5. [NRC 134.1]

sa bon dgod dang phyag mtshan dang // yang na lha yi sku nyid ni //
'bur du btod dang lugs ma ni // stobs bzhin dkyil 'khor la dgod bya //

⁴⁵ (『吉祥サンブタ・タントラ』にも・・・と説かれている)

SPT, TTP, No. 26, Vol. 2, 271.3.3-4.

bdug ma thag tu mchod nas de la dbus su phyag rgya gzhag pa ni rig ma rab tu gzhug par bya'o // ci lags
bcom ldan 'das lugs ma dang / 'dus byas dang / ri mo sna tshog dang / zhing la sogs pa las byas pa'i rig
ma'i lha mo gzhug par brgyi zhes gsungs sam /

*This sentence is not identical to the quoted passage in the VA.

Abhayākara Gupta, AM, TTP, No. 2328, Vol. 55, 154.1.3-4. [NRC 134.2.2]

gzugs ni thar kar bris pa dang brkos pa dang lugs ma dang gsar ma'i las kyi 'dus pa'o //

Abhayākara Gupta, AM, TTP, No. 2328, Vol. 55, 159.4.7-8.

lugs ma'i gzugs ni zangs la sogs pa la lugs su byas pa'o // byas pa ni shing la sogs pa'i rang bzhin no //
sogs pa'i sgras ni skud ris dang bris pa la sogs pa gzung pa'o // lugs ma la sogs pa'i cho ga ni lha nams
thams cad kyi'o //

⁴⁶ 類似の定義が NPY の第 1 章にも現れる (森 1994: 133, 126)。

「中央に別の如来を主尊とした場合、中央にいた尊は、その場所に入れ替わる」 (yadā tu madhye 'nyas
tathāgato bhavati nāyakas tadā madhyasthitas tasya sthāne tiṣṭhet /)

⁴⁷ サンスクリットは「阿闍」 (akṣobhya) 。

⁴⁸ サンスクリット写本は B C G が Lokeśa、それ以外は Lokeśvara。

⁴⁹ チベット訳は kha sbyor (サンブタ) のみで、「タントラ」に相当する rgyud は含まれない。

⁵⁰ チベット訳は mam par snang mdzad (大日) 。

⁵¹ Skt. piṭṭani が具体的にいかなるものであるのか不明。

⁵² チベット訳は mkha' 'gro ma'i であって rdo rje mkha' 'gro ma'i ではない。

⁵³ チベット訳は rdo rje kha dog dmar po。

⁵⁴ 「7つのシンボル」はラトネーシャ、阿弥陀、不空成就、そして四門の金剛鉤女以下の 4 尊を指す。

⁵⁵ ジュナーナダーキニー以下の 5 尊はそれぞれ獅子の上に乗る、シンヒニー以下の四隅の 4 尊が白象
以下の 4 つに、ラージェンドリー以下の四門の 4 尊がそれぞれ死体の上に乗る。

⁵⁶ この箇所は観想上のマンダラと描かれるマンダラの間で、マンダラの内容に違いがあることを示す
記述として注目される。描かれるマンダラの場合、さらに状況に応じてマンダラに描かれる内容が異
なることもわかる。

⁵⁷ チベット訳は rTa gdong ma であるが、sTag gdon ma と読むべき。

⁵⁸ チベット訳は「8 尊の」に対応する語はない。

- ⁵⁹ 第2重のガウリーを指す。
- ⁶⁰ チベット訳は「月輪と日輪」(zla ba dang nyi ma)。
- ⁶¹ ナイラートミヤの15尊マンダラの説明。
- ⁶² 「第1のマンダラ」というのは、『ヴァジュラムリタタントラ』にもとづくマンダラが4種類あるからである。後述するように、このうちの3種は典拠となるタントラ経典を参照するよう指示し、具体的な説明はない。
- ⁶³ この尊のみは金剛杵と新月を描くということか。
- ⁶⁴ チャンキヤの注釈書(TTP, No. 6236)などによれば、他の三つのマンダラとはヴァジュラフーンカーラ29尊マンダラ、ヴァジュラヘルカ21尊マンダラ、アムリタクンダリン13尊マンダラである。ヴァジュラムリタ21尊マンダラを含め、これら4種のマンダラを描いた作品はLo Buc (1985: Fig. 14)参照。
- ⁶⁵ 主尊は男尊であるが、「マハーマーヤー」という女性名詞のため、「マハーマーヤーの姿をとるもの」という表現をする。チベット訳は「世尊母マハーマーヤ」(bcom ldan 'das ma sgyu ma chen po)とあり、女尊とする。
- ⁶⁶ ブッダダーキニーは主尊の配偶尊。ここで「金剛薩埵」と呼ばれているのはマハーマーヤーのことである。NPYではブッダダーキニーも観想されるが、VAではこのようにブッダダーキニーのシンボルは描かないため、「墨打ちの儀軌」ではマハーマーヤマンダラは6尊ではなく5尊のマンダラとなっている。マハーマーヤとそのマンダラについては森(1992)参照。
- ⁶⁷ Skt.はuṣṇīṣaとvajroṣṇīṣaのふたつの読みが現れる。チベット訳はrdo rje gtsug tor(=vajroṣṇīṣa)。正しい名称はヴァジュラウシュニーシャと考えられるが、古い写本ではuṣṇīṣaだったのではないか。
- ⁶⁸ サンヴァラとヴァジュラヴァーラーヒーのマンダラは、それぞれ3種ずつ合計6種ある。サンヴァラマンダラは四面十二臂と2種の一面二臂が順に中尊となり、これに応じてそれぞれのサンヴァラの明妃であるヴァジュラヴァーラーヒーが中尊となるマンダラ3種がある。NPYの第13章には、これらのマンダラの尊格の特徴に関する記述がある(Bhattacharyya 1972: 26-29)。
- ⁶⁹ テキストはmukakṣiptāñjali、チベット訳は「顔に集めた両手」という意味か。
- ⁷⁰ ヤマーリのマンダラは内陣に大きく羯磨杵が描かれ、その上に尊格が配される。
- ⁷¹ サンスクリット写本のひとつ(Ms. F)はvajrasarasvatī。これはチベット訳のrdo rje dbyangs can maに一致する。
- ⁷² ヴァジュラチャルチカー以下の4尊。
- ⁷³ この尊格の名称にはamoghasiddhivīśuddhiとamoghaviśuddhiの二つの読みが写本に現れる。チベット訳はdon yod grub pa mam par dag paで、はじめの読みに一致する。ただし、ここではMss. A B Cにしたがい、後者の読みをとる。
- ⁷⁴ 「前」がどこを指すのか不明。もし、女性形の四摂菩薩が登場するマンダラであれば、第5番のヘーヴァジュラマンダラ、シンボルのみが一致するのであれば、第7番のヴァジュラムリタマンダラになる。
- ⁷⁵ チベット訳はrdo rje gnod mdzes(=*vajrasumbhā)である。
- ⁷⁶ 中央が白、東が青、南が黄色、西が赤、北が黒になる。
- ⁷⁷ ここでの方角は四仏からみて左が北、後ろが西である。(あるいは、四仏はこの場合、中尊ではなく、すべて西に頭を向けて描かれるということか)十六大菩薩が四仏の前、右、左、後ろの順に並ぶことは、『真実摂経』以来の伝統。

- ⁷⁸ 四方にそれぞれ同じシンボルが4つずつ並ぶ。
- ⁷⁹ チベット訳は「青い剣」 (ral gri sngon po) 。
- ⁸⁰ 「ハヤグリーヴァの」の語はテキストにはないが、文脈から補う。チベット訳は「さらにその外側に」と訳し、ウシュウニーシャチャクリンのシンボルの外にスンバのシンボルがあるように読める。
- ⁸¹ 光聚仏頂、白傘蓋仏頂はチベット訳では逆の順。サンスクリット写本では Ms. E のみがチベット訳と同じ順。NPY も白傘蓋仏頂、光聚仏頂の順。チベットの文献ではプトンと『タントラ部集成』(rGyud sde kun btus) が VA と同じ順 (森 1989: 253) 。
- ⁸² vijaya[usṇīṣa]と読む写本がある。
- ⁸³ 金剛界の十六大菩薩では金剛光 (vajratejas; rdo rje gzi brjid) 。
- ⁸⁴ チベット訳は「雑色蓮華の上に、茎のある蓮華を伴った羯磨杵、月輪に乗った赤い五鈷杵」(sna tshogs chu skyes kyi steng du sna tshogs rdo rje yu ba dang bcas pa'i padma dang / zla ba la gnas pa'i rdo rje rtse lnga pa dmar po dang)。 Cf. NPY reads acalā śaraccandrābhā candrastharaktapañcaśūkavajrāṅkitapañkajasya nālaṃ saagarvaṃ bibhratī (森 1989: 266)。
- ⁸⁵ チベット訳は「力、願」 (stobs dang / smon lam dang /) の順。
- ⁸⁶ チベット訳は「葉の付いたアショカ樹の花の蕾」 (lo ma dang bcas pa'i aśoka'i me tog gi chun po) 。
- ⁸⁷ サンスクリット・テキストは鈴は複数形 (ghṇṭāḥ) 。前の「鎖」 (śṛṅkhalā) に続いて複合語を形成し、鈴自体は単数であることも考えられるが、これまでのシンボルはそれぞれ単独であげられ、複合語とはなっていない。NPY では両手にそれぞれ鈴を持つので、ふたつの鈴を描くのか。
- ⁸⁸ チベット訳は rdo rje ltse lnga pa (= *pañcaśūcīkavajra) 。
- ⁸⁹ チベット訳は「北の楼閣」 (byang gi gzhal yas khang) 。
- ⁹⁰ 息災、増益、敬愛、調伏の四種法にしたがって、順に白、黄色、赤、青となるのであろう。
- ⁹¹ この直後に「第2の金剛杵輪」という語がでてくるので、これは主尊を乗せた蓮華を取り囲む、第1の金剛杵輪であろう。
- ⁹² 二つの金剛杵輪の間をつなぐ長さ4マートラ、幅1マートラの柱。
- ⁹³ 蓮華を描く場合、蓮華を花芯と蓮弁に分け、花芯の直径と蓮弁の長さを一致させるため、花芯の大きさは蓮華全体の3分の1になる。これは蓮華の描き方として本書の中で一貫している。
- ⁹⁴ 壁の部分は白、赤、黒の3色で塗り分けられるが、全体を9分割し、このうち、第1、第4、第7の部分には色を塗らない。
- ⁹⁵ 半分の金剛杵と宝を組み合わせた装飾文様。時輪マンダラ以外のマンダラでも描かれた。<12.4.1> 参照。
- ⁹⁶ この部分は意マンダラのみではなく、ロマンダラ、身マンダラのトーラナも含む。各マンダラに4つずつあるため、12となる。これらは大きさは異なるが、構造はすべて同じである。
- ⁹⁷ 身マンダラでは9分割したところを、ここでは15に分割し、これを5色に塗り分けるときに、はじめの15分の1ずつは色を塗らないところを作る。
- ⁹⁸ このトーラナは身密マンダラのトーラナを指す。
- ⁹⁹ 『無垢光』の第4章 (sādhana nāma caturthaḥ paṭalaḥ) に相当する。
- ¹⁰⁰ Skt. kāmācāra. 「好きなように」という意味か。
- ¹⁰¹ Skt. ghū[r]ṇa. Tib. zlum. ghūṇa の意味は不明。
- ¹⁰² 風輪は幅が12マートラなので、両側から内側に向かって、3マートラずつ取った残りは6マートラになる。

- ¹⁰³ 最外周の火炎輪は時輪以外のマンダラでも五色に塗り分けられる。
- ¹⁰⁴ この部分は意味がよくわからない。各方向で顔料の厚さが異なるのか。「ヤヴァ」は長さの単位として VA にしばしば登場する。
- ¹⁰⁵ 意マンダラの楼閣の外壁。
- ¹⁰⁶ 意マンダラの楼閣の中に描かれる 2 重の金剛杵輪を指すのか。
- ¹⁰⁷ 二つの金剛杵輪にはさまれた幅 4 マートルの「尊格の蓮華」(devatāpadma)を指すのか。
- ¹⁰⁸ 「尊格の帯」(devatāpattī)を指すのか。
- ¹⁰⁹ どの部分を指すのか不明。次の段落に述べられる主尊のシンボルの下の月輪と日輪を指すのか。
- ¹¹⁰ 身マンダラの外で、地輪の内側の部分。「供養の品々」が描かれる。
- ¹¹¹ 「金剛墻の 3 倍が 3 つの輪の大きさである」というこの文章は、Mss. A E G とチベット訳には含まれない。また Mss. B C ははじめの「金剛」(vajra)の語を欠く。金剛墻は虚空輪の中に描かれる金剛杵輪に対応するのか。「三つの輪」(trivalaya)がどの部分を指すのか不明。
- ¹¹² SSGT, TTP, No. 429, 46.3.3-4 (金本 2003 46-47). [NRC 134.2]

blo dang ldan pas cho ga 'dis // dkyil 'khor rdzogs par bris nas ni //
 yid ni (NRC kyis) legs par mnyam bzhag (NRC gzhas) nas //
 de yi 'og tu yang (NRC mang) brtags te //
 brgya la bga' zhis ma legs na // de ni phyir yang bcos par bya //

『○○耶経』(大正蔵 第 897 番 第 18 卷、p. 766b)

是故畫位畢已。安心普視。若有錯處即當復改。

SSGT, TTP, No. 429, 51.5.6. [NRC 134.2-3]

khrus la sogs pa byed pa'i tshe // dkyil 'khor lta ba (NRC mthong ba) gzhan bzhag ste //
 dkyil 'khor 'dri (NRC 'bri) ba'i tshe na ni // nam yang stong bar mi bzhag (NRC gzhas) go //

『○○耶経』(大正蔵 第 897 番 第 18 卷、p. 771b)

恐有失錯何以不熟凡作曼荼羅時。當令助成就者外護其處。每出外時。先其助人入於其所。令作守護必勿令空。

¹¹³ Jayabhadra, *Śricakrasaṃvaramaṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2192, Vol. 51, 281.4.8-5.1 [NRC 334.3]

de ltar bzlog nas rdo rjes la // snod ni bzang po la sogs su //
 gnas min par lhung rdul mtshon ni // de bzhin ras la sogs pa yan (P. yi) //
 yi ge brgya pa'i sngags kyis ni // bzlas pa'i dri yi chu dag gis (P. gi) //
 dbang ldan phyogs nas brtsams (P brtsam) nas su // phyi dang nang du bsang gtor bya //

略号

AM	<i>Āmnāyamañjarī: Śrīsamputatantrarājaṭīkā-āmnāyamañjarī</i> by Abhayākara Gupta.
D	Derge edition
GST	<i>Guhyasamājatantra: Sarvatathāgatakāyavākcittarahasyo guhyasamāja nāma mahākāparāja.</i>
MVAS	<i>Mahāvairocanābhisambodhisūtra:</i> <i>Mahāvairocanābhisambodhivikurvati-adhiṣṭhānavaiṇavyasūtrend-rarāja nāma dharmaparyāya.</i>
NPY	<i>Niṣpannayogāvalī</i> by Abayākara Gupta
NRC	<i>sNgags rim chen po</i> by Tsong kha pa Blo bzang grags pa
P	Peking edition

Skt.	Sanskrit
SPT	<i>Sampuṭatantra: Sampuṭa nāma mahātantra.</i>
SSGT	<i>Sarvamaṇḍalasāmānyavidhi-guhyatantra.</i>
STTS	<i>Sarvatathāgatataṭṭvasaṃgraha nāma mahāyānasūtra.</i>
SUT	<i>Śaṃvarodayatantra: Śrīmahāśaṃvarodayatantrarāja.</i>
SVU	<i>Sarvavajrodaya: Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-sarvavajrodaya</i> by Ānandagarbha.
Tib.	Tibetan
TTP	Tibetan Tripiṭaka, the Peking edition, Tokyo, Suzuki Foundation. 『影印北京版西藏大藏經』鈴木學術財団。
VA	<i>Vajrāvalī nāma maṇḍalopāyikā</i> by Abhayākara Gupta.
VDT	<i>Vajraḍākatantra: Śrīvajraḍāka nāma mahātantrarāja.</i>
VPT	<i>Vajrapañjaratantra: Āryaḍākinīvajrapañjaramahātantrarājakaḷpa.</i>
大正藏	大正新脩大藏經

サンスクリット文献

- Kālacakratāntra* (KCT), ed. by Upadyaya 1986, S. Rinpoche 1994.
- Guhyasamājatantra* (GST), ed. and translated by F. Fremantle, PhD dissertation, London University, 1971; ed. by Y. Matsunaga, Osaka, Toho Shuppan, 1978.
- Vimalaprabhā*, ed. by Upadyaya 1986, S. Rinpoche, 1994.
- Śaṃvarodayatantra* (SUT), ed. by S. Tsuda, Tokyo, Hokuseido, 1974.
- Sarvatathāgatataṭṭvasaṃgraha* (STTS), 堀内 (1974, 1983).
- Sarvavajrodaya* (SVU), 密教聖典研究会 (1986, 1987).

チベット語文献

(1) 仏説部(bKa' 'gyur)

- Āryaḍākinīvajrapañjaramahātantrarājakaḷpa* (VPT), TTP, No. 11, Vol. 1, 223.1.6-238.5.4.
- Mahāvairocanaḥhisambodhivikurvati-adhiṣṭhānavaipulyasūtrenrarāja nāma dharmaparyāya* (MVAS), TTP, No. 126, Vol. 5, 240.3.2-284.3.8.
- Śrīmahāśaṃvarodayatantrarāja* (SUT), TTP, No. 20, Vol. 2, 202.3.8-221.5.7.
- Śrīvajraḍāka nāma mahātantrarāja* (VDT), TTP, No. 18, Vol. 2, 93.2.7-144.3.5.
- Sampuṭa-nāma-mahātantra* (SPT), TTP, No. 26, Vol. 2, 245.5.2-280.2.5.
- Sarvamaṇḍalasāmānyavidhi-guhyatantra* (SSGT), TTP, No. 429, 42.5.4-53.1.1.

(2) 論疏部(bsTan 'gyur)

- Abhayākara Gupta, *Śrīsampuṭatantrarājaṭīkā-āmnāyamañjarī* (AM), TTP, No. 2328, Vol. 55, 105.1.1-249.1.6.
- Kambala, *Śrīcakrasaṃvaramaṇḍalopāyikā-ratnapradīpodyota*, TTP, No. 2161, Vol. 51, 189.5.5-201.1.8.
- Kalki Mahāpuṇḍarīka, *Vimalaprabhā nāma mūlatantrānusāriṇīdvādaśasāhasrikā-laghukālacakratāntrarāja-ṭīkā*, TTP, No. 2064, Vol. 46, 121.1.1-.
- Kṛṣṇa, *Bhagavacchrīcakrasaṃvaramaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2164, Vol. 51, 210.1.2-217.3.4.
- Jayabhadra, *Śrīcakrasaṃvaramaṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2192, Vol. 51, 274.4.8-288.2.5.

- Jayasena, *Śrīdākārṇavatāntrābhiṣekavidhi*, TTP, No. 2235, Vol. 52, 130.1.8-144.1.6.
- Tathāgatavajra, *Śrīsaṃvaramaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2226, Vol. 52, 74.1.7-85.5.3.
- Dārikapāda, *Śrīcakrasaṃvaramaṇḍalavidhi-tattvāvātāra*, TTP, No.2146, Vol. 51, 164.1.7-171.5.2.
- Dīpaṅkarabhadra, *Śrīgūhyasamājamaṇḍalavidhi* 『マンダラ儀軌四百五十頌』, TTP, No. 2728, Vol.65, 35.3.6-44.1.2.
- Durjayacandra, *Suparigraha nāma maṇḍalopāyikāvidhi*, TTP, No. 2369, Vol. 56, 142.2.4-154.1.4.
- Nāgabodhi (Nāgabuddhi), *Śrīgūhyasamājamaṇḍalopāyikā-viṃśatīvidhi* 『マンダラ儀軌二十』, TTP, No. 2675, Vol. 62, 12.1.4-18.3.6.
- Padmavajra, *Hevajramaṇḍalakarmakramavidhi*, TTP, No. 2348, Vol. 56, 85.4.5-91.2.6.
- Prajñārakṣita, *Śrīcakrasaṃvaramaṇḍalavidhi-saṃgraha*, TTP, No. 2186, Vol. 51, 262.4.1-268.1.6.
- Prajñāśrī, *Abhiṣekavidhi*, TTP, No. 2425, Vol. 57, 19.2.4-26.2.2.
- Śrīdhara, *Śrīraktayamāriṃamaṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2880, Vol. 57, 196.3.7-204.3.8.
- Saraha, *Śrībuddhakapāla nāma maṇḍalavidhikrama-pradyotana*, TTP, No. 2529, Vol. 58, 105.1.4-110.5.6.

(3) 蔵外文献

- Tsong kha pa Blo bzang grags pa, *rGyal ba khyab bdag rdo rje 'chang chen po'i lam gyi rim pa, "gSang ba kun gyi gnad nram par phyee ba"* (*sNgags rim chen mo*), TTP, No. 6210, Vol. 161, 53.1.1-226.2.7.

二次文献

- 伊藤堯貴 2000 「『◎◎耶経』蔵・漢訳テキスト研究(3)」『智山学報』49: 17-44。
- 金本拓士 2003 「『◎◎耶経』蔵・漢訳テキスト研究(4)」『智山学報』52: 17-52。
- 堀内寛仁 1974 『初会金剛頂経の研究(下)』高野山大学密教文化研究所。
- 堀内寛仁 1983 『初会金剛頂経の研究(上)』高野山大学密教文化研究所。
- 松長有慶 1998 『松長有慶著作集5 秘密集会タントラの研究』法蔵館。
- 密教聖典研究会 1987 「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-Sarvavajrodaya: 梵文テキストと和訳(II)完」『大正大学総合仏教研究所年報』9: 13-85。
- 森 雅秀 1989 「『完成せるヨーガの環』(*Niṣpannayogāvalī*) 第2章「法界語自在マンダラ」訳及びテキスト」『法界マンダラの神々(国立民族学博物館研究報告別冊 第7号)』(長野泰彦・立川武蔵編) pp. 235-282。
- 森 雅秀 1992 「マハーマーヤーの成就法」『密教図像』11:23-43。
- 森 雅秀 1994 「『完成せるヨーガの環』第1章「文殊金剛マンダラ」訳およびテキスト」『高野山大学密教文化研究所紀要』7: 113-142。
- 森 雅秀 2000 「インド密教における成就法と儀礼」『高野山大学論叢』35: 23-43。
- Bhattacharyya, B 1972(1949) *Niṣpannayogāvalī of Mahāpaṇḍita Abhayākara Gupta*. G.O.S. No. 109. Baroda: Oriental Institute.
- Lo Bue, E. 1985 The Newar Artists of the Nepal Valley: An Historical Account of their Activities in Neighboring Areas with Particular Reference to Tibet-I. *Oriental Art* 33(3): 262-277.
- Matsunaga, Yūkei 1978 *The Guhyasamāja Tantra, A New Critical Edition*. Osaka: Toho Shuppan Inc.
- Rinpoche, Sambhong 1994a *Vimalaprabhāṅikā of Kalki Śrī Puṇḍarīka on Śrī Laghukālacakratantarājā by Śrī Mañjuśrīyaśa*. Vol. 2. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies.

- Rinpoche, Sambhong 1994b *Vimalaprabhāṭikā of Kalki Śrī Puṇḍarīka on Śrī Laghukālacakratāntrārāja by Śrī Mañjuśrīyaśa*. Vol. 3. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies.
- Tsuda Shinichi 1974 *The Saṃvarodaya-tantra, Selected Chapters*. Tokyo: The Hokuseido.
- Upadhyaya Jagannatha 1986 *Vimalaprabhāṭikā of Kalki Śrī Puṇḍarīka on Śrī Laghukālacakratāntrārāja by Śrī Mañjuśrīyaśa*. Vol. 1. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies.